

ジョージ・エリオット研究 第二十二号

目次

〈特別寄稿〉

『ダニエル・デロンダ』を超えて	深澤 俊	1
-----------------------	------------	---

〈論文〉

“An Extraordinary Fate” を読む George Eliot, <i>Middlemarch</i> と Jane Austen, <i>Sense and Sensibility</i>	惣谷 美智子	11
--	--------------	----

〈書評〉

矢野奈々著 『ダーク・ヒロイン——ジョージ・エリオットと新しい女性像』 (彩流社、2017年) 319 + viii 頁	佐藤 エリ	27
ジョージ・エリオット著 富田成子訳 『回想録 ヨーロッパめぐり』 (彩流社、2018年) 310 頁	津田 聖子	37
Dermot Coleman, <i>George Eliot and Money: Economics, Ethics and Literature</i> , (Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture) (Cambridge UP, 2014), vii + 226 pp.	中島 正太	51

〈書誌文献データ〉

日本におけるジョージ・エリオットの文献 (2018年8月～2020年7月; 2000年1月～2018年7月の補遺・訂正)	大嶋 浩	57
--	------------	----

Corrigenda (前号の正誤表)		66
投稿規程		67
執筆者一覧		69
編集後記	大嶋 浩	70

『ダニエル・デロンダ』を超えて

深澤 俊

1

ジョージ・エリオット (George Eliot) の長編小説のなかで音楽への言及がもっとも多い作品は、『ダニエル・デロンダ』 (*Daniel Deronda*, 1876) と言えるだろう。エリオットはピアノ演奏を特技とし、1861年の秋にグランド・ピアノを購入して以降、ベートーヴェン (Beethoven) の曲などをかなり熱心に練習、演奏していた。エリオットのパートナーの G. H. ルイス (G. H. Lewes) も『ゲーテの生涯』 (*The Life of Goethe*) を著した批評家で、二人でドイツ文化にたいして深い理解を示していただろうと思われる。しかしこの『ゲーテの生涯』を見る限りでは、『ファウスト第一部』 (*Faust I*) の読みはよいとして、『ファウスト第二部』を思想過多と断じたり、リヒャルト・ワーグナー (Richard Wagner) を当時代の音楽とは認められなかった書簡を見ると、ルイスの限界も見てとれよう。¹

エリオットは人間の内面性を直視する傾向があり、同じ傾向をもつベートーヴェンからは芸術ジャンルを超えて刺激を受け、偉大な高みへと向かう作品を創造する環境にいた。ベートーヴェンは堅固な構成力を持ち、それと比べるとエリオットの作品の欠点が目に付いたりする。『フロス河の水車屋』 (*The Mill on the Floss*, 1860) で行き違いのあったトム (Tom Tulliver) とマギー (Maggie Tulliver) の兄妹は、作品半ばで不自然な形で離れてしまい、最後に河の洪水によって劇的なボートでの再会を果たして直後に命を絶つ。これは感動的な場面ではあるが、かならずしもじっくりと構成されているわけではない。

『ダニエル・デロンダ』は構成上、グウェンドーレン・ハーレス (Gwendolen Harleth) とマイラ・ラピドス (Mira Lapidoth) をそれぞれ中心とする、二つのテーマで成り立っており、作曲技法のソナタ形式を見習っているところがある。グウェンドーレンもマイラも歌手を目指し、音楽家

のユリウス・クレスマー (Julius Klesmer) に相談するが、グウェンドーレンは今から音楽修行を始めるには「7年遅すぎた」(Too old—should have begun seven years ago)² という理由で歌手の道を諦めさせられ、マイラの方は声量がやや足りないものの、小規模の演奏活動ならばと歓迎される。この第一主題のグウェンドーレンの生き方は、音楽家という特殊な領域を離れて普通人の生き方に進み、第二主題のマイラの生き方は音楽家という専門性に根ざした生き方になるが、このマイラたちの生き方にはユダヤ人社会の宿命が重ねられている。グウェンドーレンのテーマは人間の一つの劇的な生き方で、ドイツのギャンブル場から始まって、母親の破産、情婦のいる金持ちのマリンジャー・グラントコート (Mallinger Grandcourt) との結婚、愛しているわけでもない対象のこの夫の水死などを経て、いろいろと悩んだ末に最後には立派に生きていこうとする決意で終わる。かなり自己中心的だが人生態度は誠実で、19世紀の女性たちの新しい意欲をも表現している。

もう一つのテーマであるマイラたちユダヤ人社会の将来の方は、かなり厄介な問題を含んでいて、根底には作者がもともと持っていたユダヤにたいする本質的確信の念を何とか維持しているものの、ユダヤ民族特有の自分たちが排斥されてきた歴史や、分裂を繰り返す不幸な実態が影を落としている。その本質性は何か？ 知的な筋道を探求する傾向のあるエリオットにとって、この問題は最後には解決しなければならなかった。エリオットにはユダヤ教、キリスト教と続く一体化した世界が存在していて、その本質を極めようとする本能的な感覚があるからだ。

デロンダは最後にグウェンドーレンと会ったとき、自分はユダヤ人であって、同じユダヤ人のマイラと結婚する。そして中東 (the East) へ行って、自分たちの民族の実情を見て、国家として成立できるような貢献をしたと言う。これは作品執筆時の国際情勢とも関係していた。世界史年表を見れば、1829年ギリシア独立、1830年ベルギー独立、1861年ルーマニア公国成立、といった文字が並んでいるのが目に付く。ユダヤ人国家はローマ帝国以来消滅しており、ヨーロッパ人からすればキリスト教文化の先駆者であるユダヤ人世界に思いが行くのは当然でもあろう。しかしキリスト文化圏にいることを意識して、イギリス人読者に語りかけているジョーン・ベネッ

ト (Joan Bennett) の著書を見ると、1900年のシオニズム運動と『ダニエル・デロンダ』の背景では、状況が違っているという。³ 筆者は1897年にバーゼルで開かれた第1回シオニスト大会以降の運動を指しているのだろうが、1917年にユダヤ人国家建設を支持するバルフォア宣言を出したイギリスは、1915年にアラブ人にたいしても国家建設の支持を約束していて、これが政治的には20世紀以降、大変厄介な問題になってしまう現実さえもがある。もちろんこれはエリオットには予想すらできなかった政治状況で、これに比べるとデロンダ=マイラたちの世界はエリオットにとって一つの原理の問題にすぎないのかもしれない。しかし、現実の中東問題を越えた夢に過ぎないところがあるとは言え、文学者の理想像にはそれなりの統一性があって、その実現を検討することは、高い次元から考えて無駄とは言えないのだ。

もう一方のグウェンドーレンの方は、専門家の忠告に従って音楽の道を選ぶことはなかった。彼女は強い個性を維持しながらも、失意の人生を乗り越えて感動的な「生きる」決意をして終わっていく。読者の共感度からすれば、まだはっきりとは見えないデロンダ=マイラたちの行く末よりも、ここにはF. B. ピニオン (F. B. Pinion) も認めるような力強い明確なメッセージ⁴が示されているのは確かである。

2

だが、グウェンドーレンのテーマとデロンダ=マイラのテーマとでは作品のなかで持つ比重が違って、ちぐはぐな感じが拭えない。今から見ると50年近く前になるが、ニール・ロバーツ (Neil Roberts) は『ダニエル・デロンダ』について、「不適切な理論的主張と純粋な実験的技法という極端なテーマ」(the extremes . . . of unqualified theoretical assertion and genuine experimental art) を併せ持っている、と書きだしている。⁵ この文を読まされると何が言いたいのかとこちらも身構えてしまうが、グウェンドーレン個人のテーマとユダヤ民族のテーマという、まったく異質のテーマを掛け合わせたエリオットの功績を、著者としてはそれなりに認めているのだ。それで

もグウェンドーレンの生き方は、悲劇的な要素が強いアンバランスなものだと言うのだが。

デロンダ＝マイラたちのユダヤ人問題については、『ダニエル・デロンダ』の出版当時、あるいはその直後の作者たちの手紙などのやりとりでも、執拗に取りあげられている。作者としては読者からの反発を恐れながらも作品のなかで、キリスト教世界にこのユダヤの偉大な伝統性を正当に位置づける必要を痛感しているようだ。この点、エリオットの考察はかなり知的なもので、神学書ならぬ文芸作品のスタイルでこれを表現することが適切であったのかどうか、疑問にも思われよう。しかし作者は純粋に知的理論付けだけで表現できない面のあることも感じていよう、作者としてはこの直感力を表現するのに文芸作品に頼らざるを得ない。こういう矛盾めいたところに、音楽の直感力も絡んでくる。エリオットが作曲家でピアニストのフランツ・リスト (Franz Liszt) の演奏を間近で聴いたとき、「生まれて初めて本当の感動を得た——初めてピアノの本物の響きを聞いた」(“For the first time in my life I beheld real inspiration—for the first time I heard the true tones of the piano” [GE Journal, Weimar, 10 August 1854])⁶と記している。クララ・シューマン (Clara Schumann) の演奏も間近で聞いて感動したが、このエリオットの関心は小説技法としても広がっていった、『フロス川の水車屋』では若者たちの少人数の合唱が大きなテーマとなつてかなりの筋が進行していき、『ダニエル・デロンダ』ではユダヤ人と関係が深いと思われてもいる音楽への言及がきわめて多くなる。この作品では音楽家としてロッシーニ (Rossini) が言及されたり、ベリーニ (Bellini) が出てきたり、エリオットが傾倒していたベートーヴェンも出て来る。音楽愛好家であったエリオットには馴染みのこぢんまりとした演奏会場が、小説のなかでは通常の舞台として使われる。

このような音楽に比重の重い雰囲気の中で、ダニエルがユダヤ人であることを意識してまず行動しようとしたことは、現在置かれているユダヤ民族の実情を見ることだった。モーディカイ (Mordecai) として知られているエズラ・コーエン (Ezra Cohen) はユダヤの大義を信じて結核で死んでいくが、その妹マイラは音楽の才能に恵まれ、ピニオンに言わせれば「理想化」

(idealized)⁷された人物になっている。この作品がデロンダとマイラの結婚という幸福な結末で終わるとき、ユダヤ人問題で不純物とも見られる父親ラピドス (Lapidoth) はデロンダの指輪を持ち逃げしてデロンダ=マイラの世界から消えている。ここからも分かるように、デロンダ=マイラの問題はある程度理念化されたユダヤ人問題として出されている。社会問題として考える場合には、排除され虐められたユダヤ人たちの問題は重要だが、思想的・宗教的なキリスト教の先駆者としてのユダヤ教は、エリオットにとってまず不純物を取り除いて考える必要があったようなのだ。しかし、『ダニエル・デロンダ』として作品が書かれている段階ではユダヤ人問題を解明しようというデロンダの意識は、方向性が定まっているだけで、デロンダ自身はまだ活動していない。当時のヨーロッパに民族国家が生まれている流れは前述の通りだが、この流れのなかでイタリア独立のメッセージともなったヴェルディ (Verdi) のオペラ『ナブッコ』 (*Nabucodonosor [Nabucco]*, 1842) は現在でもよく上演される演目だが、この作品にあるヘブライの捕虜たちの合唱「行け、わが思いよ、黄金の翼に乗って」 (*Va! Pensiero, sull'ali dorate*) は第3幕で、バビロニア王ネブカドネザルの捕虜になったユダヤ人たちが独立を求めて歌う曲である。このオペラをエリオットが見ている直接の記録はないようだが、当時かなりよく知られていた曲で、エリオットの問題意識にはぴったりである。このオペラでは、ネブカドネザル王がヤーヴェ信仰を許すことで、ユダヤ人たちは解放され、救われるのだが。

3

このグウェンドーレンとマイラの生き方がクレスマーの判断を得るまで声楽家志望だったことは共通しているが、クレスマーはグウェンドーレンの適性と年齢を見たらうえて、生活のために舞台に立つことは諦めさせる。一方マイラにたいしては小規模のリサイタルや、個人指導の面で、声楽家としての活動を賞賛している。この判断の差は、判断される二人の音楽美学的な時代感覚の相違から出るもので、クレスマーが一方の感覚の支持者だったという批評家の論調もあるのだが、⁸ 私からすればグウェンドーレンは技能面から

音楽に関わりのない生き方をするように勧められ、他方でマイラは音楽の道を選んでよいと、相対する判断を職業音楽家からなされた結果、それ以降の作者としてはそれぞれ違った生き方をする主人公たちの人生の誠実さを考察して、記録を残していったのではないかと思われる。ここに第一主題、第二主題と提示をした作曲のソナタ形式の技法が、私の頭にははっきりと浮かぶ。この作品で対立する概念として音楽技能の適・不適を出しているのは、音楽技能が作品のなかで重要な要素になるだけに、極めて効果的な主題だからである。そしてこれはユダヤ人問題という大きなテーマを考えるうえで、かならずしも差し障りのない対立概念だからである。

R. T. ジョーンズ (R. T. Jones) は、『ダニエル・デロンダ』が作者最後の作品であることに注目して「もっとも自伝的要素の少ない小説」(the least autobiographical of the novels) であり、普通の人間の生活なり、一般的な約束ごとに作者の眼が向いていることに注目している。⁹ 人物像はもっぱらグウェンドーレンに関心が向いているが、これはグウェンドーレンの生き方が音楽家という特殊なものから一般的な領域で生きる人へと変化しているからだという。そして特殊な、というか、読み方によっては狂気の領域に入るユダヤ人モーディカイが、もう一つの主題の案内役として描かれている。ここでは、ユダヤ人問題は個人の問題を越えた、普遍的テーマとしてエリオットのなかでは位置づけられている。

モーディカイは、ユダヤ人と判明したデロンダに、自分にひらめいたユダヤ人の意義を語って聞かせる。このユダヤ人のなかにある直感が第二主題を展開させるものだろうが、これがどのように展開するのか、読者にとって、いやそれ以上に作者にとって、想像力を集中させなければならない問題だった。第一主題のグウェンドーレンは自分のためであったり、自分の家族のためであったり、とにかく生活のために職選びを相談するのだが、第二主題では生活は何とか保証されている状態であって、同じ宿命で生まれている人間のあいだの繋がりが問題となる。大雑把に言えば、この二つの違いは人間の個の問題と種の問題で、かなり抽象的な問題である。グウェンドーレンにとっては自分の才能なり、人と接するときの愛の問題などが重要なのだが、彼女は冷たいくらい冷静だったり、頑固だったりする。個と周囲との

対決が問題だからである。第二主題となるデロンダ、マイラたちの方はモーディカイの直感を中心に、共感だったり愛情だったりの世界が関連して広がっていくべきものだ。これが自然な世界だと言いたいところなのだろうが、『ダニエル・デロンダ』では不自然なほどその先が書かれないうまになっている。つまり作者は、一般論以上には書けなかったのではないか。

ユダヤ教の思想、ユダヤ人社会の神話伝説を作品化することは、おそらくエリオットの得意とするところと言えるであろう。小説として評判がよいか悪いかは別として、15世紀のフィレンツェを扱った『ロモラ』(Romola, 1862-63)は時代を限定することで、それなりに読み応えのある立派な著作になった。古代ユダヤ文化や社会についても、フィレンツェのレベルで限定的に表現するのであれば、『ダニエル・デロンダ』を充実させることはエリオットにとっておそらく可能だったことだろう。

しかし19世紀の後半はこの反応を見せるのに、あまりにも多様な時代になってしまっていた。将来を含めユダヤ問題を考えることは、『ダニエル・デロンダ』の出版時期に多くの反応が見られたように、エリオットにとって同時代の大きな問題だった。思想的にも、政治的にもエリオットに余程の覚悟がなければならなかったのだろうし、その先はむしろ同時代の読者の想像力に訴える方が安全で、建設的だという判断があったのかもしれない。

少し時代が跳ぶが、1984年に刊行されたスザンヌ・グレーヴァー(Suzanne Graver)の著書は社会学で重要な概念であるゲマインシャフト(Gemeinschaft)が、エリオットの時代と20世紀後半では意味内容が変化してしまっていることを指摘している。¹⁰『ランダムハウス辞典』(*The Random House Dictionary*)の1973年版でGemeinschaftは単に“an association of individuals having sentiments, tastes, and attitudes in common; fellowship”と定義され、「血の結びつきや明確な背景の消滅とともに、精神や心の特性が今や失われている」(Along with the disappearance of blood ties and fixed locale, even the attributes of mind and spirit are now absent.)と述べられているからだ。¹¹『社会科学国際辞典』(*The International Encyclopedia of the Social Sciences*, 1968)のより公式的な定義では、知的な類似性を認めるものの、重点はやはり共同体の感情面に置かれている(the idea of intellectual affinity

appears, but the emphasis again is on community of feeling) としている。¹²

19世紀の感性的共感も失われている時代に、知的な共感でモーディカイの言う「見える社会の灯をともしせ」(Let the torch of visible community be lit!)¹³の言葉も、グレーヴァーに言わせれば光の当たらない社会に向けられていて、この共同体はもはや観念的なものに過ぎなくなっていて、実体のある理想的な共同体ではないと言う (The organic remains an imaginative, not an embodied, ideal)¹⁴。

時代の大きな変化は、作品の構成にも大きな影響を与えてしまう。調和を目指して組み立てられていった作品体系は時代から取り残されて、解決できていないままアンバランスとして残ってしまうのである。先程のグウェンドーレンとマイラの二つの主題を、同じ比重で対照的に書くわけにはいかなかった事情は根本的なもので、世界の原理や構造が大きく変化していく時代のなかでは、作品を音楽技法上の構成体として落ち着きのあるものにするためにも、エリオットには世界観レベルの大きな問題が、納得いくまで解明されなければならなかったのではなかろうか。

注

- 1 “The Mutter and I have come to the conclusion that the Music of the future is not for us—Schubert, Beethoven, Mozart, Gluck or even Verdi—but not Wagner—is what we are made to respond to” (GHL to Charles Lee Lewes, Berlin, 29 March 1870 in Gordon S. Haight, ed. *The George Eliot Letters*, vol. 5 [Yale UP, 1955] 85).
- 2 George Eliot, *Daniel Deronda*, ch. 23 (Penguin Classics, 1986) 307.
- 3 Joan Bennett, *George Eliot: Her Mind and Her Art* (Cambridge, 1948) 186.
- 4 “The manner in which she [Gwendolen] accepts the loss of Deronda confirms the assurance she gives her mother that she is ‘going to live’. The conclusion is open-ended, but decidedly truer to life (and more modern) than that of *The Mill on the Floss*: it is more hopeful than of *Middlemarch*” (F. B. Pinion, *A George Eliot Companion* [Macmillan, 1981] 217-18).
- 5 Neil Roberts, *George Eliot* (Paul Elek, 1975) 183.
- 6 Gordon S. Haight, ed. *The George Eliot Letters*, vol. 2 (Yale UP, 1954) 170.

7 Pinion 202.

8 当時の音楽界は台本作家ウジェーヌ・スクリーブ (Eugène Scribe, 1791-1861) に支えられたユダヤ系ドイツ人ヤコブ・リープマン・マイヤーベアー (Jakob Liebmann Meyerbeer, 1791-1864) のパリでの活躍がめざましかった。彼の才能は “of quite a secondary order” (“The Romantic School of Music. Liszt on Meyerbeer-Wagner,” *The Leader*, 28 Oct. 1854) とルイスは言うのだが、マイヤーベアーの音楽は以前のロッシーニたちの音楽に代わって楽しまれ、当時大変な人気があった。クレスマーはグウェンドーレンの音楽の古さを攻撃するが、これはベリーニたちの感情表現が時代遅れになっていたと思われたからである。エリオット自身はこの「古い」音楽を好んでいたが。(Beryl Gray, *George Eliot and Music* [Macmillan, 1989] 101-03 参照)

9 R. T. Jones, *George Eliot* (Cambridge UP, 1970) 116.

10 Suzanne Graver, *George Eliot and Community* (U of California P, 1984) 25-26.

11 Graver 26.

12 Graver 26.

13 Eliot 596.

14 Graver 243.

“An Extraordinary Fate” を読む George Eliot, *Middlemarch* と Jane Austen, *Sense and Sensibility*

惣谷 美智子

Jane Austen が達成した仕事は伝統となるのみならず、過去に対しても「遡及効果」(“retroactive effect”) (14) をもつ——F. R. Leavis は、自著 *The Great Tradition* において、こう看破した。では、彼がオースティンの伝統の後継者とみなす George Eliot の場合はどうであろうか。本論では、エリオットの *Middlemarch* とオースティンの *Sense and Sensibility* を取り上げ、二作品における主人公たち、Dorothea Brooke と Marianne Dashwood がともに辿ることになる「異常な運命」を端緒に、エリオットの「遡及効果」について考えてみたい。

主人公たちの運命を「異常」にみせている彼女たちの運命の発端と結末の間にある落差、そして落差に対する受容反応として生じる「沈黙」、それらは両作家の共通項と思われるが、そうした共通項はまた、たとえば Roland Barthes の想定する、「考え込むテキスト」(“Pensive Text”) にもいくぶん通底するものではないだろうか。拙論ではこうした議論を通して、リーヴィスが指摘するオースティンの「遡及効果」がエリオットの場合にもあてはまるのか、また仮にあてはまるとすれば、それはどのようなものになるのかを考えていきたい。

“An Extraordinary Fate”

リーヴィスはまず “The great English novelists” としてオースティン、エリオット、そして Henry James、Joseph Conrad の四人の名前を挙げるのだが、オースティンに関しては、「特別な理由があり、まだかなり検討を要する」(9) として詳述するのを控えている。彼はまたエリオットがオースティンから受けた影響を指摘し、この作家がオースティンに深く敬服していたことには十分な証拠があるともするのだが、しかし、その影響に関しては具体的な議論展開には及んでいない。影響が「たとえこの上なく深遠な重要性を帯

びたものであれ、偉大な独創的作家間の影響の定義は困難極まりない」というのが、その理由である。

There is evidence enough that George Eliot admired her [Austen's] work profoundly. . . . What one great original artist learns from another, whose genius and problems are necessarily very different, is the hardest kind of influence to define, even when we see it to have been of the profoundest importance. . . . she was capable of understanding Jane Austen's greatness and capable of learning from her. And except for Jane Austen there was no novelist to learn from—none whose work had any bearing on her own essential problems as a novelist. (18-20)

確かにオースティンとエリオットでは、実際のところ類似よりは相違のほうが際立つ。前者はユーモアに富んだシンデレラ・アーキタイプを核とした風習喜劇コメディ・オブ・マナーズの作家であり、他方、後者は逆に、David Cecilなども指摘するように、「ユーモアは抑制され」（299）、作品自体が作家の厳格な道徳的価値基準、精神的態度に裏打ちされた一つの重厚な“criticism of life”（291）の態をなしている。とすれば、この両者では、むしろ相違のほうが際立っていても当然かもしれない。

本論では、エリオットに対するオースティンの「もっとも深遠な重要性を帯びた影響」（Leavis 19）の一端を、「異常な運命」を切口にして考えていくが、まず主人公たちの運命を「異常」にみせている二項対立（Antithesis）、つまり二作品に張り巡らせている二律背反について考えておきたい。たとえば Mark Schorer は、『ミドルマーチ』では、“Things as They Are” と “Things as They Should Be” という古典的な二項対立が主要なテーマをなしていると指摘している。具体的には「ミドルマーチのようなコミュニティの日常が孕む現実」と「ドロシアおよび他の人間が目指す途上にある、さらに崇高なユートピアとしての現実」（37）との対立である。

他方、オースティンもまた同様に、こうした二項対立を深く意識していた作家であった。『高慢と偏見』はいうに及ばず、『分別と多感』もまさに「中

心概念をそのままタイトルにした観」(Cecil 287)のある作品である。二項対立は、「まさしく意味のスペクタクル」(Barthes, *Barthes* 138)ともいうべき現象を引き起こすものであるのだが、そうした効果については、エリオットもオースティンも作家として十分認識するのみならず、積極的に創作の核にすえていたに違いない。『ミドルマーチ』ではドロシアと Celia という姉妹の対比、また『分別と多感』でも二姉妹、Elinor とメアリアンには一見明瞭な対比がみられる。もっとも二項対立という観点からは、そうした姉妹間の対比であるよりは、むしろ姉妹それぞれが一個の人間のなかに併せ持つ二項対立、そしてレトリックの〈転覆〉が仕掛けられた文脈のなかに産出されてくるもの、つまり、作者と読者との読みの共謀関係において生じてくる二項対立のほうがさらに注目に値するだろう。(ただし紙幅の関係もあり、また議論の拡散を避けるためにも、ここでは指摘のみにとどめる。)

ともあれ、そうした対比の網は主人公のみならず、たとえばドロシアの伴侶となる Edward Casaubon と Will Ladislaw、そしてメアリアンの相手となる二人の男性、Colonel Brandon と John Willoughby というように、登場人物間にもみられる顕著なものだが、他方、主人公に「異常な運命」をもたらしことになる、いわば大枠としての二項対立のほうは、いくぶん意味論的なものとなろう。それは物語の開始(の期待)と(その期待を裏切る)結末との二項対立であり、まさしくその落差が彼女たちの運命を「異常」にするのだ。結末の「異常」性は結末自体にあるよりは、むしろ効果として生み出されてくるものとしてある。それは受容者側が読後に分け持つことになる、ある種の異常な「感じ」であるといってもよいだろう。最終的に両主人公が受け入れることになる運命がどのように「異常」であるのか、まずそれぞれの異常な運命の発端と結末との落差をみてみよう。

異常な運命：発端と結末の落差

『分別と多感』のメアリアンの場合、この主人公は「人、その生涯において恋を再びすること能わず」を自分の「金科玉条」(93)として公言する多感な情熱家であり、典型的な夢見る乙女である。

そうしたメアリアンとウイロビーのいわば様式化された恋愛は、物語開始

時の期待を裏切り、物語の半ばで挫折する。美青年のウイロビーは、*Pride and Prejudice* の主人公 Elizabeth Bennet がいみじくも慨嘆するように、「美男子もまた醜男同様、食べていくだけのものはもたねばならない」という「屈辱的」(PP 150) な現実屈して去っていき、メアリアンは悲恋の〈定石〉に違わず、命がけの恋を失くして生死の淵をさまようことになる。結局、病気から立ち直った後の彼女が選択することになる結婚は、メアリアンがこれまで公言していた彼女の信条、理想とはことごとく相反する「異常な運命」となるのである。“Marianne Dashwood was born to an extraordinary fate. She was born to discover the falsehood of her own opinions, and to counteract, by her conduct, her most favourite maxims” (378). メアリアンは「生涯に唯一」の恋という金科玉条を手放し、ウイロビーとは似ても似つかぬ、そして彼女自身のかつての言葉を借りれば「結婚するには手遅れの老人」(378) と結婚することになるのである。

他方『ミドルマーチ』のドロシアの理想の夫は、彼女を教え導くことのできる「父親のような存在」(10) であり、また彼女の熱烈な渴望はひたすら「殉教者」へと向かう。両主人公はともに生命感をたぎらせた情熱という、一種の“peculiarities”によって特徴づけられるのだが、そうした特異性、風変わりさが当人の「運命」に影響をおよぼしてくる点においても二人は同様で、ドロシアの場合、それは作家自身によってすでに冒頭の第一章で予言されていたものであるのだ。

... she was enamoured of intensity and greatness, and rash in embracing whatever seemed to her to have those aspects; likely to seek martyrdom, to make retractations, and then to incur martyrdom after all in a quarter where she had not sought it. (8)

そしてドロシアの結末は、以下のようなものになる。

They [Dorothea and Ladislaw] were bound to each other by a love stronger than any impulses which could have marred it. No life would have been possible to

Dorothea which was not filled with emotion, and she had now a life filled also with a beneficent activity which she had not the doubtful pains of discovering and marking out for herself. . . . Dorothea could have liked nothing better, since wrongs existed, than that her husband should be in the thick of a struggle against them, and that she should give him wifely help. (782-83)

最終章では、冒頭との整合性は保たれ、ドロシアは「殉教者」として収まる。彼女は、冒頭の予言通り、自分が「求めていなかったところで殉教者」となり、しかも、その「殉教者」ぶりは、「自らおぼつかない苦勞をして見つけ出そうとしたのではない」という、作者の注釈（つまりは、作者の保証）によって、正当性を発揮する。彼女は最終的に殉教者としての自分の正当な居場所を確保する。この主人公は「殉教者」という役割を、自分に降りかかった“lot”として、むしろ、幸運にも与えてもらうことになるのである。

こうした收拾のつけかたはメアリアンの場合も同様であろう。愛することも中途半端にはできない彼女は、「異常な運命」によって不本意にすり替えられたはずの夫に、今は心からの愛を捧げているのである。“Marianne could never love by halves; and her whole heart became, in time, as much devoted to her husband, as it had once been to Willoughby” (379).

Sympathy のありか：テキストの内と外

以上みてきたように、「情熱」、「異常な運命」、そして主人公たちが自身の運命に満足を見出している点でも両者は符合する。しかし、さらに興味深い酷似はそれ以降にある。そうした主人公たちの運命に対する周囲の者たちの反応である。主人公たちの満足とはうらはらに、周囲の者たちは決して満足していない点も両作品には共通する。

主人公たちの運命に感じられる「異常」さとは、実は主人公自身のものであるよりは、むしろ主人公の周囲の者たちに感じられるものではないのか。それは物語の開始段階から、彼らが自然に思い描き出してきた理想からすれば、両主人公たちが迎えることになる現実、つまりその運命の落差に感じられる「異常」といってもよい。まさしく“Things as They Are”と“Things as They

Should Be”の落差がここにはある。だが、それは決して主人公たち自身が感じる「不満」ではない。これまでみてきたように、周囲の者たちが抱くことになるこの「異常」感は、「不満」感によほど近い。

両作品は、主人公たちの運命のみならず、その運命に対する sympathy のありようまで似通ってくるのだが、しかし厳密には、両作品ではその「周囲」の立ち位置が微妙に異なっている。図式的に言えば、『分別と多感』の場合、異常を感じる「周囲の者」がテキストの外の読者であるのに対して、『ミドルマーチ』ではそれがテキストのなかの登場人物であるということになる。

ここで「異常な運命」の発生現場に戻れば、メアリアンの場合、ブランドンとの結婚は、テキスト内で主人公を取り囲んでいる登場人物たちの、「全員賛成」(“general consent”)によって事実上、決定される。

... her [Mrs. Dashwood's] wish of bringing Marianne and Colonel Brandon together was hardly less earnest ... and to see Marianne settled at the mansion-house was equally the wish of Edward and Elinor. They each felt his [Brandon's] sorrows, and their own obligations, and Marianne, by general consent, was to be the reward of all. (378)

結局、メアリアンは周囲の者たち全員の賛同によって隙間なく包囲され、むしろ結婚にまで追いつめられる結果となる。ここで効果を発揮するのは、「全員賛成」という表現のもつ喜劇的インパクトであろう。世間知らずのメアリアンが情熱のおもむくままに描いたロマンスは、いまやエリナを含む「彼ら」の「全員賛成」によって断罪、あるいは、もう少し穏便にいうなら、修正される。このメアリアンの物語は「周囲の思いやりに応えたいと思う」ほどにまで、主人公は人間的成長を遂げたのだと解釈する“Bildungsroman”的読みも可能となろう。

しかし、「全員賛成」という表現が帯びている突出したもっともらしさと、恋愛という非常に個人的なものとの組合せ(衝突)が発散する意味の過激さは、読者に別種の反応をも引き起こすことになる。この結末は、単に sensibility 過多のメアリアンへの罰としてのアイロニカルな終結のしかたを

超え、彼女の周囲の完璧な賛同が、むしろ読者の不協和音を呼び起こすことになるのだ。

たとえば Marvin Mudrick は、メアリアンを裏切ったのは、登場人物のウイロビーであるよりは、むしろ他ならぬ作者オースティン自身であることを示唆するのである。

We may be assured that everyone turns out to be prudently happy, with even a share of domestic satisfaction left for the villain [Willoughby]. But we are not to be reconciled. Marianne, the life and center of the novel [*Sense and Sensibility*], has been betrayed; and not by Willoughby. (93)

この批評家は、ある程度、読者の代弁者と考えてよいだろう。“general consent” という、テキストからの一方的ないわば最終通告により、読者は「異常な運命」の解釈と意味をそのまま譲り渡されてしまうのだが、彼はそうした読者の「不本意」を代わりに吐露している。このようにオースティンの場合、テキスト内で一応幕引きされ終結しているはずのものが、テキストの外で、つまり読者側の受容反応のなかでは宙吊りにされ、くすぶり続けるのである。

他方、それとは対照的に『ミドルマーチ』では、こうした主人公を取り巻く周囲の者たちの「全員賛成」によって結末が切り捨てられることはない。エリオットの場合、オースティンの結末に感じられていたある種の距離感とは、登場人物たち自身がいわば身代わり体験してくれることによって埋められる。「異常な運命」に対する無念の思い (pity) といったものは、テキストの外ではなく、テキスト内に描き出されるのだ。彼らはテキスト内でいわば読者の代弁者役を果たす。二作品におけるこうしたテキストの内外の違いは、おそらくエリオットの真面目な人生批評的リアリズム小説と、主人公のロマンス癖を半ば揶揄するオースティンの風習喜劇という、文学ジャンルの相違、つまり重厚度の差とも関係しているのだろうが、しかし究極的には両者は大差ないものとなる。ドロシアを知るミドルマーチの多くの住民たちもまた、ドロシアが単に妻、母として平凡な人生に埋没してしまう運命が承

認できずにいるからである。彼らは一様に満たされぬ思いを抱きながらも、しかし、あとは沈黙してしまう。

Many who knew her, thought it a pity that so substantive and rare a creatures should have been absorbed into the life of another, and be only known in a certain circle as a wife and mother. But no one stated exactly what else that was in her power she ought rather to have done—not even Sir James Chettam, who went no further than the negative prescription that she ought not to have married Will Ladislaw. (783)

サー・ジェイムズでさえ他の住民となんら変わるところはない。彼もまた、意味的には、黙^{もだ}しているのだ。ここでは、エリオットはまさにオースティンの「沈黙」を掘り起こしているように思われる。

“Pensive Text”

サー・ジェイムズは、オースティンの風習喜劇の場合とは異なり、なるほど読者の身代わり体験はしてくれるものの、しかし彼もまた完全な代弁者とはならず、その行為の内訳はこれまでみてきたように「沈黙」にほぼ近いものとなる。それから先は読者に委ねられるのだ。こうしたテキストの様相、さらに厳密に言えば、テキストの読みは、たとえばバルトのいう“Pensive Text”にも通じるものがあるかもしれない。以下では、『ミドルマーチ』、『分別と多感』というテキストに、さらに第三項として Honoré de Balzac の短編 *Sarrasine* (1830) を交錯させて、物語の結末に挟み込まれる「沈黙」の視点から、エリオットとオースティンのさらに本質的な関係性、つまり「偉大な伝統」上にある、エリオットの場合の「遡及効果」について議論を進めたい。

バルトは *S/Z* の構造分析において、(バルト自身によれば) “classic text” である『サラジーヌ』の新たな読みを試みているが、その最後の項目が “The Pensive Text” (“*Le texte pensif*”) (216-17) である。だが『サラジーヌ』のみならず『ミドルマーチ』も、またある意味では「考え込むテキスト」ではな

いのだろうか。なるほど『サラジーヌ』同様、古典として分類されているエリオットのこの長編は、序と終曲の枠内に行儀よくおさまるように語られはする。しかし、このテキストが語る人生のプロセスも同様に「沈黙」という、逆説的だが、実は「表情豊か」(S/Z 217)な方法によって「考え込むテキスト」を形づくっているように思われるのだ。

「考え込むテキスト」とは、バルトによれば、「意味に満ち満ちていながら、最後の意味だけはつねに取りのけておくようにみえる」テキスト、つまり「沈黙」し、それ自体が考え込むテキストのことである (S/Z 216)。そして『サラジーヌ』においてサー・ジェームズの「沈黙」の等価物となるのは、Rochevide 侯爵夫人のそれであろう。この作品もまた大きな落差を残したまま終局をむかえる。美の極致 Adonis もかくやと思われる「類稀な美貌の青年」と、墓場の臭いさえ漂わせる「不気味な醜悪老人」の同一性——物語の最後に、信じがたい謎の解明を突きつけられた侯爵夫人は言葉を失ったまま、この落差を前にじっと考え込むばかりである。そしてバルザックのこの作品は、次のような最後の一文を残したまま終わってしまう。“And the Marquise remained pensive” (254).

こうした結末にバルトは、「意味の宙吊り (suspension)」(217)を見て取っている。

Like the Marquise, the classic text [*Sarasine*] is pensive: replete with meaning . . . it still seems to be keeping in reserve some ultimate meaning, one it does not express but whose place it keeps free and signifying . . . For if the classic text has nothing more to say, at least it attempts to “let it be understood” that it does not say everything . . . (216-17)

『サラジーヌ』におけるロシュフィド侯爵夫人のしぐさは、まさにドロシアの“lot”「運命」を容認しない周囲の登場人物の反応ではなかったか。そしてそれはまたこの作品を読む者たちの反応でもある。たとえばセルは、ラディスローの愛にしがみつくとドロシアの「平凡きわまりない人間の満足に焦がれる、単純で子どもじみた熱望」に、彼女の「失望」や「憂鬱」(300,

320) を読み取り、そして作家ヘンリー・ジェイムズも、ドロシアの夫となるラディスローに対してきわめて辛辣な裁断 (356) を下すのだが、彼らもまた、サー・ジェイムズら登場人物の「無念」の思いの先へは進まない。「ならば彼女ができることで、当然すべきであったことはなにであったのか」という問題提起に対して、究極的にはその解決に向かうかわりに、「ラディスローと結婚すべきではなかった」を繰り返すばかりであるからだ。

そして読者も例外ではない。その意味では『ミドルマーチ』も同様に、「沈黙」し、考え込むテキストの側面をもつだろう。このテキストも同じように、「すべてを語り尽くしているわけではないということを、『読者が察するままにしている』」ふしがあるからである。

確かに結末におけるこうしたエリオットの「沈黙」は、たとえばヘンリー・ジェイムズも閉口するようなエリオットの「饒舌」ぶり——“In reading . . . we lack space. . . The author [Eliot] wishes to say too many things, and to say them too well . . .” (James 358-59) ——からすれば、意外の観は免れない。しかし、いかに饒舌であれ、エリオットは結末では最終的な意味を与えることを周到に回避している。彼女には作家としてのいわば禁欲もまた備わっている。それは、たとえば Charlotte Brontë が *Villette* の結末で貫き通した、あの頑とした<沈黙>であり、それはまた、バルトが見て取る「間接言語」(“indirect language”) の寡黙さにも通じよう。すなわちそれは「最終的な意味に名を与えることを避ける」(*Essays* 231-32) ための文学的戦略が企む、あの沈黙である。

しかし、そうした「沈黙」は、いったいどのような意味をもつのだろうか。それを明らかにするには、たとえば「物語」というものに対する Linda Hutcheon の了解のしかたが示唆を与えてくれるだろう。ハッチオンは物語を説明する二つの考えかたを挙げている。物語とは、一つには、「特定の文化がもつ『基礎イデオロギー』の表象」(“a specific cultural representation of a ‘basic ideology’”) であり、また、いま一つは「人間の普遍的特性」(“a general human universal”) として捉える考えかたである (*Adaptation* 176)。後者の「人間の普遍的特性」について、もう少し具体的にいうなら、物語とは「われわれが世界を、そしてそこでの人間の行動を理解するための、時代を

超えた認識モデル」(“... timeless cognitive models by which we make sense of our world and of human action in it.”) (Ryan 242-43; Hutcheon 175) であり、さらにいえば、「ものごとの輪郭を形成し、また意味を構築していく行為」自体が、そもそも「われわれが物語や詩のなかで行っていること」(Chamberlin 8; Hutcheon 175-76)なのである。もしそうした理解のしかたが正鵠を射たものであるとするなら、「物語」のまさしく核ともいべきあの「異常な運命」に挟み込まれた「沈黙」、ある種の「空白」は読者を刺激し、物語への積極的参加を促すものとなるだろう。それはオースティン、エリオット両者に共通する作家的戦略ともなるのである。

“Not a supreme artist, but a great writer.”

『ミドルマーチ』に「考え込むテキスト」的側面が考えられるとすれば、このことはまた、興味深いことに、エリオットを介して英文学の「伝統」上にあるオースティンにまで遡ることができるだろう。オースティンがはたしてそうしたもので狙っていたのかどうか、それはわからない。しかし、『ミドルマーチ』から遡って、今、『分別と多感』を再読してみれば、それは現代のわれわれ読者には「考え込むテキスト」の面影を宿しはじめるようにも思われる。

主人公メアリアンを異常な運命へと追いやった、オースティンのあの「全員賛成」に関していえば、オースティンはすでに読者側の反発、少なくとも違和感（「異常な」感じ）を見込んで、否、むしろその織り込みを意図さえしているのではないかと思わせる。主人公の結婚に対する周囲のあの完璧な賛同は、その有無をいわせぬ完璧性ゆえに、マドリックを代弁者とする読者の不協和音を呼び起したことはすでに述べたが、そうした読者側の反撃は、むしろ作者の狙い通りものになったということかもしれない。こう考えてくれば、オースティンのこの、いわば「反撃を（秘かに）期待するテキスト」もまた「考え込むテキスト」の変種ということにもなるだろう。

オースティンは、メアリアンの味方をしてやりたいという、読者側の一種の義憤めいた感情を大いにあてにしている。まさしく作者は読者との距離（違和感）を巧妙に微調整しながら知的に冒険している。落差という起爆剤

は喜劇の常套的戦略ではあろうが、しかし『ミドルマーチ』の「異常な運命」を通して、オースティンの主人公メアリアンのそれを遡及的に透かしてみれば、その「異常」性からも、なかば開かれた結末という現代性さえ浮かび上がってくる。とすれば、エリオットの作品もまたオースティンに対して、リーヴィスのいう「遡及効果」をもつことになるだろう。

... her [Austen's] relation to tradition is a creative one. She not only makes tradition for those coming after, but her achievement has for us a retroactive effect: as we look back beyond her we see in what goes before, and see because of her, potentialities and significances brought out in such a way that, for us, she creates the tradition we see leading down to her. Her work, like the work of all great creative writers, gives a meaning to the past. (Leavis 13-14) (emphasis added)

リーヴィスによれば、オースティンは後に続く者たちのために伝統を創るのみならず、過去に対して「遡及効果」をもつという。つまりオースティンは、彼女に先行した作品がもつ可能性や意義といったものを発掘し、すべての偉大な創造的作家たちがそうであるように、「過去に対して意味を与える」のだ。こうした考えは、自身が作家、詩人そして批評家でもある Jorge Luis Borges にも通じるものであるだろう。“... every writer *creates* his own precursors. His work modifies our conception of the past, as it will modify the future” (Hutcheon, *Parody* 84)。

「過去に対して意味を与える」という点では、エリオットもまた、オースティンという「偉大な創造的作家」と同様のことをしているのではないだろうか。『ミドルマーチ』は文字通り「遡及的」に『分別と多感』を浮かび上げらせ、エリオットはオースティンに連なる。エリオットの作品もまた、過去に対して意味をもつとすれば、ここでエリオットが遡及的に浮かび上げさせている「過去」とは、イギリスの「偉大な伝統」であり、エリオットの先輩作家でもある、まさしくオースティン自身ということもあろう。ちょうどオースティンが、英文学史の重要な系列の一つ“Samuel Richardson—Fanny

Burney—Austen” (Leavis 13) という繋がりのなかで、リチャードソン、バーニーという「過去」を遡及的に浮かび上がらせているように、エリオットもまた「ジェイン・オースティン」という「過去」を遡及的に蘇らせる。

もしエリオットが「自分で知っている以上に真実を語っている」(Schorer 43) とすれば、『ミドルマーチ』はまさしく、エリオットが自分の知っている以上に真実を語った小説の一つになる。セシルがいうようにエリオットは「偉大な作家」である。

All the same, her achievement is a considerable one, more considerable than that of many more accomplished writers. *Middlemarch* . . . rouses far deeper emotions, sets the mind far more seriously astir. For though she was not a supreme artist, George Eliot was not a minor one. When all is said and done she is a great writer. . . . (328)

この偉大な作家は、ドロシア・ブルックという、作家自身と同様に、最高ではないにしても決して小型の主人公でもない、「偉大な」主人公を創造した。この作家のそうした人物創造の偉大さゆえに、読者は感情と精神を深く、また真摯に揺り動かされ、主人公の運命に寄り添い伴走する。そして読者はいつしか無意識のうちに、読むだけでなく、書きはじめるといえるだろう。というのも、たとえば Ann Gaylin は、言語学の知見 (McGregor 362-72) を援用して、対話を「立ち聞きする者」は聞き逃した部分を自ら「物語に創り上げる」(27) ことを主張しているが、そうした解釈行為は、テキストを「立ち聞き」、つまり解説する読者にもまた当てはまると思われるからだ。読者もまた同様にテキストの欠落部分を自ら「創り上げる」ということは大いに考えられる。読者は「異常な運命」という自らのテキストを織り継ぎはじめるといってもよい。

エリオットが『ミドルマーチ』で創出した主人公の「異常な運命」は、おそらく現代的な意味においても、この作家がオースティンの真の後継者であることを、おのずから証明する試金石ともなるであろう。

*本論は、日本ジョージ・エリオット協会第17回全国大会（於慶應義塾大学、2013年12月7日）シンポジウム「ジョージ・エリオットと19世紀女性作家」での口頭発表を大幅に加筆修正したものである。

Works Cited

- Austen, Jane. *The Works of Jane Austen*. Vol.1, *Sense and Sensibility*. 1811. Edited by R. W. Chapman, Oxford UP, 1974.
- . *The Works of Jane Austen*. Vol.2, *Pride and Prejudice*. 1813. Edited by R. W. Chapman, Oxford UP, 1976.
- Barthes, Roland. *Critical Essays*. 1964. Translated by Richard Howard, Northwestern UP, 1972.
- . *S/Z*. 1970. Translated by Richard Miller, Hill and Wang, 1974.
- . *Roland Barthes by Roland Barthes*. 1975. Translated by Richard Howard, Hill and Wang, 1984.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists*. 1934. London: Constable, 1966.
- Chamberlin, J. Edward. *If This Is Your Land, Where Are Your Stories?: Finding Common Ground*. Knof, 2003.
- Eliot, George. *Middlemarch*. 1871-1872. Oxford UP, 2008.
- Gaylin, Ann. *Eavesdropping in the Novel from Austen to Proust*. 2002. Cambridge UP, 2007.
- Hutcheon, Linda. *The Theory of Parody*. 1985. U of Illinois P. 2000.
- Hutcheon, Linda and Siobhan O'Flynn. *A Theory of Adaptation*. 2nd ed. Routledge, 2013.
- James, Henry. "Unsigned Review." *Galaxy*, March 1873, *George Eliot: Critical Heritage*, Edited by David Carroll, Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948. Penguin, 1974.
- McGregor, Graham. "Eavesdropping and the Analysis of Everyday Verbal Exchange." Edited by Alan R. Thomas, *Methods in Dialectology*. Multilingual Matters, 1988, 362-72.
- Mudrick, Marvin. *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*. 1952. U of California P, 1974.
- Ryan, Marie-Laure. *Narrative as Virtual Reality: Immersion and Interactivity in Literature and Electronic Media*. Johns Hopkins UP. 2001.
- Schorer, Mark. "Fiction and the 'Matrix of Analogy.'" *The World We Imagine*, Farrar, Straus and Giroux, 1968.

バルト、ロラン. 『S/Z バルザック「サラジヌ」の構造分析』, 1973. 沢崎浩平訳, みすず書房, 1986. 本文中の S/Z からの和訳引用は、すべて上記の沢崎浩平氏の訳を使用させていただいた。

Reading “An Extraordinary Fate” :
George Eliot’s *Middlemarch* and Jane Austen’s *Sense and Sensibility*:

Michiko Soya

Synopsis

F. R. Leavis in *The Great Tradition* (1948), presumes the existence of a “great tradition” in British fiction and declares that Austen was one of its ancestors. Moreover, he points out that George Eliot understood the greatness of Jane Austen and felt that her works were powerful enough to be tools from which to learn. He indicates that the continuity that originates in Austen was inherited seamlessly by Eliot, though this “continuity” is not concretely developed in his discussion.

Just what kind of relationship does Leavis imply existed between Eliot and Austen? In this paper, I compare Dorothea Brooke in Eliot’s *Middlemarch* and Marianne Dashwood in Austen’s *Sense and Sensibility* from the viewpoint of, as Austen called it, the “extraordinary fate” that befalls each protagonist. As Mark Schorer points out, there are classic oppositions between “Things as they are” and “Things as they should be” in *Middlemarch* with the same being true in *Sense and Sensibility*. These oppositions leave a significant gap between the beginning and the ending of both stories. Consequently, Dorothea chooses Will Ladislaw instead of Edward Casaubon, and, on the other hand, Marianne marries Colonel Brandon, not John Willoughby. The fates of these protagonists, naturally and literally seem “extraordinary.”

According to Leavis, Austen’s work, as is the case of all great creative writers, holds meaning for the past. That is, the pieces by Austen expose the potentiality and meaning inherent in previous works. Considered from this point of view, Leavis’s “retroactive effect” can also be discovered in Eliot’s writing. Eliot’s works, like Austen’s, retroactively exudes the potentiality and meaning of a unique Austen past. Eliot’s literary device of bestowing the “extraordinary fate” to her protagonist, Dorothea, enables the writer to revive Austen and make the sheer literary ancestor retroactively effective even to the readers today.

矢野奈々著『ダーク・ヒロイン——ジョージ・エリオットと
新しい女性像』

(彩流社、2017年) 319 + viii 頁

佐藤 エリ

本書は、ジョージ・エリオットの小説におけるいわゆる「ダーク・ヒロイン」達に焦点を当て、エリオットが彼女達を通して新たな「女性らしさ」を模索し、「男性との新たな人間関係」を構築しようと試みていることを明らかにする(1)。ダーク・ヒロインとは、「黒髪で黒い目」という外見の特徴だけではなく、「内面における悪」を抱えたヒロイン達をも含んでおり、エリオットは、彼女達の心理的葛藤を精緻に描き出している(2)。著者によれば、ダーク・ヒロイン達は「家庭の天使」に代わる「新しい女」の先駆けとみなすことが出来る(3-4)。エリオットは、これらのヒロイン達の「黒」や「魔性性」を利用し、既存の女性へのステレオタイプを打破しようと試みた。また彼女は、後期作品において彼女達に「黒服」を着用させ、「新しい女」に見られる「男性化」への傾向を強める(5)。その上で著者は、社会的・家庭的役割における男女の二項対立に対し、作品における「黒」・「魔性性」・「水のイメージ」の表象とその機能が、いかに作品世界を豊かなものになっているのか、そして「エリオットの考える理想の女性像とは如何なるものであったのか」(8)について論じる。

本書は三部構成になっており、第一部で「女性像における二項対立」の解消、第二部で「男性領域」への侵入、第三部で「新たな『女性らしさ』の模索」と「男性との『共存』」をそれぞれのテーマとし、前・中・後期の主要小説を網羅的に論じている。第一部は全三章、第二部は全二章、第三部は全一章の全六章から成り、これに序章と終章が加わる。これより各章の内容を見ていくこととする。

第一章では、「エイモス・バートン師の悲運」のミリー、「ギルフィル師の恋物語」(以下、「ギルフィル師」)のカテリーナ、『ミドルマーチ』のドロシアを通して、ヒロイン達の変貌と共に、枠に囲われた絵が破壊される様を描

くことで、エリオットが『『家庭の天使』像の崩壊を示唆』(31) しようとしていることを論証している。ミリーを「粹」に囲われた典型的な「家庭の天使」として描いたエリオットは、「ギルフィル師」において、ダーク・ヒロインの持つ要素の一つである知性を欠くものの、ダークな外見を持つカテリーナが、「内面の悪と葛藤する」ことで成長していく様を描いた。カテリーナは、「細密画の破壊」後の精神的変貌(45-46)にも象徴されるように、ダーク・ヒロインの原型であるジャネットの先駆けと言える(47)。更に『ミドルマーチ』では、ドロシアの精神の変化が細密画との関係に描きこまれている。「粹」からの脱出と細密画の排除を並列させ、エリオットは女性が「家庭の天使」から解放される様を、絵画への言及を通して「視覚的に」描いている(59)。

第二章では、各作品における「ダーク・ヒロイン」と「フェア・ヒロイン」の対比的な描かれ方について触れながら、黒髪のヒロイン達——「ジャネットの悔悟」(以下、「ジャネット」)のジャネット、『アダム・ビード』(以下、『アダム』)のヘティー、『フロス河の水車場』(以下、『フロス河』)のマギー——の反抗を通じた、エリオットの「社会が造りあげた理想像の脱構築」の試み(64)について論証している。『牧師たちの物語』の前二作品のヒロイン達と比較すると、ジャネットにおける「内面の葛藤と道徳的覚醒の心理描写」(65)は卓越しており、のちのダーク・ヒロイン達と三つの点——「教育」・「悪と黒髪」・「他者への共感」——を共有している(66)。彼女は、自身が受けた「一流の教育」を活かすことが出来ず、「悲惨な結婚生活」を送るものの、一方でその教育は彼女の「精神的成長」と「社会的視野」の拡張に貢献する(66-70)。ジャネットと姑の確執は、黒と白により表象され、黒髪のジャネットと金髪の姑の外見と内面の相違が描かれる(73)。更に「家庭の天使」にとって「不可欠の要素」である子供に恵まれなかったことで、ジャネットの姑との確執及びジャネット自身の「悪との闘い」はより深刻なものとなるが、この「悪を克服」することがダーク・ヒロインの精神的成長への活力となり、新しい世界への開眼がもたらされる(74-75)。最終的に、ジャネットが福音主義の牧師であるトライアン師と「共感」し合い、精神的成長を遂げることは、福音主義への熱狂的信仰から

脱し、人間性への信仰を持つようになったエリオットの「精神遍歴の投影」と解釈出来る(80-81)。

次に『アダム』における対照的なヒロイン達である「善」のダイナ(金髪)と「悪」のヘティー(黒髪)の「同質性」に着目し、悪と善の部分を持ち合わせたダーク・ヒロイン像について考察する。ダイナとヘティーは共に、「現実を無視する世界に埋没」(83)し、それぞれ布教活動と嬰兒殺し事件を通して「村人に影響を与える」(84)ものの、彼女達の影響力は一定的なものであり、「既存の身分の枠や規則の枠」(87)にとらわれ、外の世界に向かって開かれることのない「ヘイスロープの閉塞性」を打破することが出来ない。二人に見られる「同質性」は、「悪」と「善」の「距離の近さ」を感じさせ、女性である限りどちらであろうとも「自分の希望や夢」を実現できない厳しい時代の風潮が表されている。しかしながらあえて外部への影響に目覚める前の共同体を描き、そこに埋れつつも影響力を持った二人のヒロイン達を通して、エリオットは「個人の試み」の重要性を示唆している(93-94)。

『アダム』とは異なり、『フロス河』では、黒髪のヒロインへの顕著な擁護が見られる。更にマギー自身が口にする「金髪批判」は、異端者側に立つ経験をしたエリオットの「正統と異端の規範を逆転させたい」という願望の投影でもあり、それがダーク・ヒロインの造型へとつながったという(101)。しかし異端視される黒髪女性であるマギーを結末において聖女に変容させ、エリオットは金髪女性への批判をやめる。そして内面の苦悩を抱える金髪女性であるロモラを描いたことからわかるように、「装飾的」なダークから「象徴的」なダークへの変化、すなわち女性の外面から内面へと視点を移していく。その過程において黒髪は、「従来のヒロインに見る特質」へ疑問を投げかける役割を果たしている(102)。

第三章では、男性を脅かす「メデューサ」へと変容し、「とりわけ魔性が強いダーク・ヒロイン達——ジャネット、マギー、『ダニエル・デロンダ』(以下、『ダニエル』)におけるグウェンドレン——の「魔性」に託された意味を論証している。ジャネットの反抗は「衣服と『メデューサ』」(109)のイメージを通して描かれており、衣服の選択をめぐる夫へのささやかな反抗を契機とし、ジャネットは自立の一步を踏み出す。更にトライアン師と出会った後、

彼女は衣服を選択することにおいて積極的な心情の変化を見せる。「自己否定、禁欲、懺悔といった宗教上の誓願」を連想させる黒いドレスを選択することは、聖職者であるトライアン師に対するジャネットの同胞意識、「懺悔をして、再び信仰心を取り戻したい」という彼女の「強い願望」の反映である(111)。すなわち自らの意思で黒服を選択するジャネットの姿勢には、服従の過去からの脱却と、トライアン師の遺志の継承が表象されている。更に昏睡状態の夫の幻覚の中で、彼女がメデューサへと変容することには、家父長制の転覆が示唆されている(113)。

次に「マギーと魔女狩りの関係」及び彼女の「魔女性」の意味を考察する。魔女狩りの歴史において、様々な女性達が「異端者」の烙印を押されたが、著者はとりわけ、男性医師達のもつ権限を脅かす存在として、魔女の烙印を押されて処刑された「民間女性医療師」の例をあげて、「マギーの聡明さと魔女狩り」との接点を説明する(116)。またマギーの「魔女性」とは、彼女の悪魔性を表すのではなく、エリオットがイメージとして彼女に付与したものであり、女性たちが本来内包する「魔性の部分」に目覚めた「新しい女」のように、女性が隠していた本性が表層化された結果生まれたものだという(121-22)。

第三章の最後では、これまでのダーク・ヒロイン達と比べてとりわけ強い魔性を持つグウェンドレンに着目する。グウェンドレンには1880-90年代のイギリス小説に登場した、「新しい女」との共通点が見られる。一方で彼女に付与される蛇、すなわちメデューサの破壊性は、「宿命の女」を思わせる。しかしグウェンドレンは、蛇の持つ「破壊」と「再生」という両面性を持ち合わせており、最終的に彼女は「宿命の女」から離れる。しかし「新しい女」へ向かって「直線」を進むこともない、という「エリオット独自の女性像」として描かれている(139)。

第四章では、フェアな外見を持ちながら黒装束に身を包み、心に闇を抱えるダーク・ヒロインであるロモラの女性像に注目する。この章において論じられるサヴォナローラの分身としてのロモラ像は、「ロモラの理想化」についての批評の歴史に新たな光を照射する。彼女が経験する「服従の神聖」と「反抗の神聖」の間での葛藤は、サヴォナローラの抱える苦悩と重なり

あっている(162)。また彼女の黒装束も、黒衣の修道士サヴォナローラとの同質性を強調するものである(172-73)。政治的な技量に欠けたことから、「孤高」の人物となり「神の国」を実現できなかった彼は、「聖母マリア」として崇められるロモラと共通している(176)。エリオットは、ロモラが現実的な人間関係を離れた村で「神の国」の「教祖」となることを通して、現実世界において「神の国」の実現を目指そうとしたサヴォナローラの試みを皮肉る(177)。ロモラが「理想化されすぎたヒロイン」として批判を浴びるのは、彼女がサヴォナローラの分身であることを批評家たちが見落としてきたことが原因だ、と著者は指摘する。更に彼女は、支配する男性達への服従と反抗を繰り返した後、ペストが蔓延する村で人々を助けたことにより、「服従される者」となる(167)。また最終的に女性で構成される「家母長家庭」の長となるロモラは、「男性主導を退けた新しい女性」としての立場を獲得する(169)。このようにロモラの黒服は彼女の男性化、サヴォナローラ的側面、男性的行動力の獲得を示すのである(175)。

第五章では、エリオットが「黒服」を着用するヒロイン達を描くことに託した意味について考察する。1800年代の小説や絵画において、女性達は「白」い衣服を身につけることが多かった。19世紀後半になっていわゆる「新しい女」と呼ばれるタイプの女性達が、職業と結びつく「黒服」を身につけるようになる。ダイナの場合「黒服」は、彼女のメソジスト女説教師としての「アイデンティティ形成」に影響を与えるとともに、着飾ることを好むヘティーと彼女を対照的に描くことによって、エリオットは外見よりも精神が豊かであることの重要性を強調する(198-99)。

次に被服のもつ「自己の確認・強化・変容」の「社会的心理的機能」に着目し、『急進主義者フィーリックス・ホールト』に登場するトランサム夫人において「自己強化・変容」機能がいかに働いているかについて考察する(199-200)。エリオットが描く女性たちの中でも、とりわけ内面の暗さが強調されるトランサム夫人にとって、黒服は苦悩を隠し、威厳ある存在として印象づけるための「自己強化」の機能を果たしている(202)。また夫人が他者に本来の自分を明らかにする時、それが黒服を「脱ぐ」行為に表れている(208)との指摘は興味深い。

トランサム夫人の黒服が「自己強化・変容」の役割を果たしていたのだとすれば、『ミドルマーチ』のバルストロード夫人、『ダニエル』のグウェンドレンにおいて黒服は、『情報伝達』機能を果たしている(209)。罪人となり苦悩する夫に寄り添う時にバルストロード夫人が黒服に着替えることには、屈辱を感受しようとする彼女の決意が示されている。また「喪服」として描写される「黒服」は、「社会的な死」として地域社会からの追放を意味する。同時に夫人の黒服は、彼女の心を伝えようとする夫へのメッセージとなり、情報伝達の機能を果たしていると言える(210-11)。グウェンドレンの場合には、「黒服」が夫への反抗心の表れとなっており、自分の精神的弱さを隠し、内面を強化することで男性と対等の関係を築こうとする彼女の姿勢を暗示するものとなっている(212)。

当初ヒロインの黒服には、エリオット自身の禁欲的側面が投影されていたものの、やがて「黒服」の効用が多様性をもつようになり、ここにエリオットが女性の生き方全般を小説を通して模索しようとしていたことが伺える。男性的な「強い意志と不屈の精神」を示す黒服を、ヒロインたちに纏わせることにより、エリオットは女性を「男性の領域」へと「侵入」させようと試みたのである(217-18)。

第六章では、水のイメージの多義性に着目すると共に、水のイメージを通して、エリオットが「家庭の天使」と「家庭の天使」からの逸脱という二項対立を如何に解消しようとしたのかを明らかにする(223-24)。「ジャネット」においては、ジャネットの精神の危機が水のイメージによって表象されていたものの、やがて「危険性」を孕んだ水は「洗礼の水」のイメージへと変化し、「女性と結びつく水」は「女性再生」を示唆するのである(228)。

次に、ヘティーと水のイメージが結びつけられることで読者に与える効果と、彼女における水の意義について考察する。水は彼女にとって「現実からの逃避」と「夢の世界へのいざない」という二つの役割を果たしている(230)。彼女が流す涙は、現実の困難から逃れ、「穏やかな水の世界」を求めようとする彼女の本質を表している。放浪の旅において、絶望の淵にあって池に身を投じることが出来ないのは、水の世界が「厳しい現実の世界」へ

と変わってしまうことを恐れ、現実を受け入れられない彼女の姿勢を示す。最終的に自身の魂の浄化と再生を成し遂げられなかったヘティーだが、他者の心の「再生」には貢献し、また彼女の強烈な自我と自分の夢に固執する姿勢は、自己犠牲的なダーク・ヒロイン達とは違った「悪のイメージ」を読者に与える(241-42)。

物語全体が水と密接に関わりを持つ『フロス河』について著者は、聖オググ伝説の聖母マリアや聖人オググとマギーを結びつけてきた従来の解釈に対し、マギーが「聖女マグダラのマリアへと変容した」とし、その解釈を可能にするべく、水のイメージに焦点を当てながら論を展開する。マギーのスティーヴンへの情熱は、「河の流れ」に喩えられていたり(244)、彼女の精神的・肉体的葛藤もまた、水のイメージと結びつく。またマギーとマグダラのマリアが結びつく根拠として著者は、「悔悛」を繰り返し「赦し」を請うこと、エリオットがマグダラのマリアに取り憑いていた七つの悪霊のエピソードを、マギーのビルデウングスロマンを描く際に借用していること、スティーヴンとの出会いによって目覚めた官能性等を挙げており、とりわけスティーヴンと別れ、聖オググに帰った後、過去からの深い絆で結ばれていた人々に対し、マギーの流す懺悔の涙が、生涯をかけて涙を流したマグダラのマリアと通底する(256-57)との指摘は興味深い。マギーにおける水のイメージは、彼女を「新しい女」へと向かわせながらも、因習の世界へ引き戻す(259)。

『ダニエル』においても水(とりわけ海)のイメージが、グウェンドレンの精神状態を表すものとして用いられている。夫グランドコートとの最後の船旅において、夫が溺死した地中海へと身を投げる彼女の行為は、「洗礼」と解釈することが出来、水は彼女に「再生」をもたらすと同時に、彼女自身の「女性性」への目覚めを促す(269)。更に『ダニエル』の作品世界には、両性具有的なデロンダとモーディカイ、男性の領域へと踏み込もうとするグウェンドレンとレオノラなど、「ジェンダーがボーダーレスな世界」を実現している(279)。ダーク・ヒロインに自らの理想を託しつつ、最終的にダニエルが物語において大役を果たすこととなったのは、エリオットが「女性の力の限界」を悟ったためと解釈できる。しかしながら「女性性」と「男性性」

は共に「人間としての精神の調和」には不可欠なものであり、ダニエルの外見的容姿と内面世界は、ダーク・ヒロインから継承されている(282-83)。

以上、本書を概観してきた結果、著者の論考により、エリオットのダーク・ヒロインがいかにか独創的な女性像を示しているかが明らかになったと言える。「男女の二項対立の解消」を望みながらも、「男性らしさ」「女性らしさ」が失われることを恐れるエリオットの「自己矛盾」が、まさにダーク・ヒロイン達の造型へと繋がったのである。本書がとりわけ優れているのは、エリオット自身の複雑な葛藤が投影されたダーク・ヒロイン達を、作品において用いられている多様なイメージや要素を手がかりに、同時代の思想的背景も合わせて丹念に論じている点にある。また、エリオットをめぐるジェンダー批評においてまだ光の当てられていない解釈を丁寧にあぶり出し、説得力のある論証がなされている。例えば、エリオットが同時代のフェミニスト達の運動に対し曖昧な立場を貫いていた理由として、これまではエリオットの「福音主義キリスト教への熱狂的信仰」、ルイスとの関係により親類や友人との関係が悪化したため、「女としての自分の立場をますます耐えがたくする価値体系を受容し、作品においてそれを賞揚」せざるを得なくなったことで彼女が陥った「構造的矛盾」、「改良主義的な考え方」や「いたづらに女性の優秀さを主張することへの批判的な態度」などが挙げられていた。これらの先行研究における見解に加え矢野氏は、エリオットが「時代が造りあげた女性像に惑わされて、あるがままの自然体の女性の姿、そして人間性格の複雑性を重視する目を失う可能性を恐れていた」(11)のではないかと、という新たな理由を示した上で、ダーク・ヒロイン達を通してその理由を実証しようとしたこと、更にはエリオットが描き出した「人間の心理と内面世界の複雑性」に見られる「二十世紀の主題」を明らかにしたことにおいて、エリオットのジェンダー研究に新機軸を打ち出している(14-15)。「黒服」を扱った章においては、社会心理学的視点、「色彩心理学」を用いた論考が展開され、エリオット作品の現代的読みの可能性も提示する。前期小説については「黒髪」、後期作品については「黒服」を「ダーク」を構成する要素の中の着眼点として取り入れていることも、本書のオリジナリティの一つであり、トランサム夫人やバルストロード夫人など、中心となる女主人公ではない女性達

について言及されていた点も興味深かった。エリオットの「ダーク・ヒロイン」達の解釈の可能性の深さを改めて実感させる研究書であった。

ジョージ・エリオット著 富田成子訳

『回想録 ヨーロッパめぐり』

(彩流社、2018年) 310頁

津田 聖子

青白磁の空を背景に、ドレスデンの街並みが描かれたブックカバー、その優しい手触りのカバーを剥がすと、萌黄色の表紙が現れる。この本はまずは、視覚と触覚によってルイスとメアリアンという知の巨人カップルの旅立ちに誘ってくれる。

エリオットにとって、旅をする第一の目的は「人生の拡大」であり、「手軽な物見遊山ではなく、教養に新たな本領が生まれるかもしれないと期待を抱いて」(215頁) 行うものである。ちなみに、これは、6つの「回想録」最後のイタリア旅行を終えたばかりのエリオットの言葉である。

1回の旅が平均3ヵ月というのはおそろしく長旅という印象を受けるが、19世紀中頃イギリス上層中流階級の間で流行したアフリカやエジプト、または日本に至るグランドツアーが背景にあることを念頭に入れると、それ程驚くべきことではない。大英帝国のプロパガンダとしてのグランドツアーという枠組みの中にこの「回想録」を置いて読み直せば、無給のいわば駆け出し時代の若き女性であるメアリアンが、ときには、高飛車に、旅先で出会う人物、絵画、建築などに対して忌憚のない持論を展開していることも理解できる。

さて、この『回想録 ヨーロッパめぐり』は、34歳のエリオットが6年間にルイスと同行した旅の、「回想録」を翻訳したものである。1849年、父親の死の直後に出かけたブレイらとの旅に始まり、1880年クロスと新婚旅行で訪れたイタリア旅行の悲劇的結末に至るまでの、エリオットの、いわば旅人生の中でも、特に選択されエッセイ風に綴られた旅の「回想録」である。以下の6篇からなるので、便宜上、各回想録に番号をつける。

1. 「ワイマール——1854年」 (“Recollections of Weimar 1854”)

2. 「ベルリン——1854～55年」 (“Recollections of Berlin 1854-55”)
3. 「イルフラクーム——1856年」 (“Recollections of Ilfracombe 1856”)
4. 「シリー諸島とジャージー——1857年」 (“Recollections of the Scilly Isles and Jersey 1857”)
5. 「ミュンヘンからドレスデンへの旅——1858年」 (“Recollections of our Journey from Munich to Dresden 1858”)
6. 「イタリア——1860年」 (“Recollections of Italy 1860”)

この訳本の魅力は、①エリオット研究の重鎮による翻訳書であると同時に、②原書にはない写真・イラスト付きの解説書であり、③2011年に出版された訳者の著書『ジョージ・エリオットと出版文化』(南雲堂)(以下、『出版文化』)の続編的研究という3つの側面を併せもつところである。全310頁のうち、実に100頁を訳者による詳細な〈解説〉が占める。『出版文化』の後にこの訳本を読めば、メアリアンという若い女性が、この6年間に如何にして並み居る女性作家予備軍を尻目に、小説家エリオットとして幸運なスタートを切り、偉大な女性作家に上り詰める礎を築くことができたかが、出会いや当時の出版事情を背景に可視化され、そこに、訳者のこの2冊にわたる大きなストラテジーが垣間見えてくる。

この訳書は、Margaret Harris and Judith Johnston, eds., *The Journals of George Eliot* (Cambridge UP, 1998; 以下 *Journals*) 所収のエリオットによる回想録を翻訳したものである。訳者は詳細な解説と注をつけるのに、この「回想録」執筆と同時期にエリオットが書いた日記 (*Journals* 所収) と書簡 (*The George Eliot Letters*, 9 vols. ed. Gordon S. Haight [New Haven: Yale UP, 1954-78] 所収; 以下 *Letters*) の2冊を1次資料として使っている。おかげでこの訳書1冊で、メアリアンとルイスの旅に読者ははぐれることなく同行できるのである。当時メアリアンが抱えていた金銭問題や兄姉とのもめごとなど、彼女の苦境を語る私的な「手紙」は、表向きに書かれた「回想録」には現れない裏事情を提供し、小説家エリオット誕生のプロセスを解明する貴重な資料となっている。

巻末の参考文献にみられる2次資料には、Rosemary Ashton による

George Eliot: A Life (Harmondsworth:Penguin,1997) 並びに *G. H. Lewes: An Unconventional Victorian* (London:Pimlico, 2001) や、Haight の *George Eliot: A Biography* (New York and London:W.W.Norton & Company,1995) と言ったエリオット／ルイス関連の基本書はもとより、北欧神話、ヴィクトリア朝の博物学などが含まれる。いかにも富田氏らしい幅広いジャンルにわたる文献は、この翻訳が資料実証主義に徹していることを示している。

訳者が参考にする *Journals* では、エリオットの各回想録の前に編者 (Margaret Harris and Judith Johnston) による簡単な解説がおかれている。脚注では、頻出する英語から見た「外国語」の英訳が、巻末の索引では、人名・作品・地名などの情報が提供されている。訳者はこれらを参考にしているが、訳者自身による〈解説〉や〔注〕が付加されていることは言う迄もない。〈解説〉では各回想録のテーマを3点に絞って旅の総括が行われる。本書に登場する多数の人物の名前の後に、〔注〕をつけているが、とくに読者にとって助かるのは、当時は注釈など不要、知っていて当然とされた地方の名士や著名人、地名に対する説明である。〔注〕があって初めて読み流すことができる。

エリオットには特に興味がない読者も、ヴィクトリア朝イングランドを抜け出すことによってより自由を手に入れた女性によるトラベル・ライティングというジャンルの一環として、本書を楽しめるかもしれない。翻訳本ということを意識させない富田氏の日本語は、メアリアンの同国人であるイザベラ・バード (Isabella L. Bird) が綴った『日本奥地紀行』 (*Unbeaten Tracks in Japan*, 1878) のような本のファンを新たな旅に導いてくれるのではないだろうか。

超情報化時代といわれる現在の楽しみ方として、訳者の〔注〕を手掛かりに、ネット検索によって世界を広げていくことができる。この件については、「3. イルフラクーム」のところで詳述する。

では、この翻訳書にどのような工夫がなされているか、さらに具体的に見ていこう。序文・目次に次いで、2人が訪問した主要都市などを示す地図が出てきて、彼らの足跡が一目瞭然となる。また、活字のみの原書と違い、彼らが旅先で出会った人物、建造物、街並み、美術作品のイラストや写真が散

りばめられ、本書を視覚的にも楽しませる旅紀行にしている。以下、各回想録順に、訳者の創意工夫の詰まった労作を検証していきたい。

1. ワイマール——1854年

『ゲーテ伝』執筆のための取材に赴くルイスに同行して、メアリアンは1854年8月2日から3ヵ月間、ワイマールに滞在する。それに先立つ同年7月、2人はロンドンで同棲生活を始めるが、ワイマールへの旅はその直後の逃避行であると同時に、世間の非難にもめげず、2人が非合法結婚を公然と始める決意の旅立ちでもあった。

まず、訳者の〔注〕が如何に詳しいか、2、3具体例を挙げてみよう。まずは、フランクフルトから10時間の夜汽車と馬車を乗り継ぎ、このドイツ文学の聖地に到着した2人の最初の宿、エルププリンツについての記述である。

町の中心に古くから建つホテル《エルププリンツ》〔シラー、ナポレオン、リスト、ワグナーなどが逗留した有名ホテル。サッカレーの『虚栄の市』（第六二章）にもドビン一行が逗留する宿として登場する〕の前に来ると、馬車はやっと停まった。（18頁）

前述の *Journals* の編者による注はない。訳者の〔注〕は、そのホテルに宿泊することがどんな意味をもつかを読者に伝えてくれる。この旅で、2人はシラーやゲーテの家を訪れ、リストに出会い、ワグナーのオペラを鑑賞するのだ。

次に挙げる詳細な〔注〕の例は、『ゲーテよりフォン・シュタイン夫人への書簡集』の編集者アドルフ・ショルとギムナジウムの校長ザオペに案内されて、ルイスとメアリアンが大公妃の離宮を訪れる場面である。

私たちはティーフルト〔ワイマール郊外にある大公妃の離宮と公園〕へ行き、風変わりな城を見学した。ここはかつてアマーリア〔ザクセン＝ワイマール＝アイゼナハ公エルンスト・アウグスト二世の妃（一七三九～一八〇七）。結婚の二年

後に夫が死去したため、長男カール・アウグストの摂政として一七七五年まで公国を統治。知的で進歩的な彼女は芸術のパトロンとしても知られ、自身も作曲をする才女)の住まいだったが、その後ずっとカール・フリードリッヒ〔カール・アウグスト・フォン・ザクセン=ワイマール=アイゼナハ大公(一七五七～一八二八)の子供じみた収集品の宝庫となっている。(32頁)

もう一つ、ルイスとメアリアンが、公爵の夏の別邸、エッタースブルクへ遠出をした時の記述から例を挙げよう。

ゲーテがまだ若い頃、宮廷人たちとしろうと芝居をしたり大騒ぎに興じた現場〔ゲーテは宮廷の素人芝居のための脚本を書き、アマーリア大妃やカール大公と共に自らも度々出演した。夏の夜、松明とランプでライトアップしたイルム河畔でこの戯曲を上演したり、俳優たちとワイマール、ベルヴェデーレ、エッタースブルク、ティーフルトを練り歩いた〕なので、前々から興味をもっていたのだ。(33頁)

文中に〔注〕があることで、頁をめくって探す労をとることなく詳細な説明を読める利点がある。一方で、〔注〕が長すぎるため、文が途切れて読みにくい面もある。

さて、ワイマールの旅の特徴は、何といても、自然の美しさと綺羅星のごとき人物たちとの出会いである。黄昏時のベルヴェデーレ宮へと続く街道や美しい公園、モミの木、ブナの本、菩提樹の並木、木漏れ日、栗の並木、夕焼けの茜色等々、メアリアンはワイマールの自然に魅了される。訳者が選ぶ言葉は巧みで、メアリアンの心を溶かした光景の幽玄的な美しさを、彷彿とさせる。

人物に目を向けるなら、ワイマールでの夥しい数の出会いの中でも、最も印象的なのは、リストとの出会いと交流である。リストが指揮するヴェルディのオペラを鑑賞し、その威厳ある顔立ちと美しく波打つ髪にメアリアンは心ときめかす。また、彼が楽長を務めるワイマール劇場では、ワグナーのオペラ、『さまよえるオランダ人』、『タンホイザー』、『ローエングリン』

を鑑賞する。リストは当時、夫ある身の貴夫人と同棲中であり、メアリアンは自分たちと同じ境遇にある2人に勇気づけられたのか、彼らとの家族ぐるみの交流を愉し気に誇らしげに語っている。本書を手取ることで、読者は居乍らにして、この時代のワイマールの文化的雰囲気疑似体験できるのである。

若きメアリアンはこの旅で、すでに文壇で揺るぎない地位を確立していたルイスに同行したおかげで、夢想だにしなかった人脈の宝庫を半ば開いたのであり、小説家エリオット誕生の始まりの旅となった。

2. ベルリン——1854～55年

ワイマールに3ヵ月滞在した後、メアリアンは、『ゲーテ伝』の取材旅行を続けるルイスと共にベルリンを訪れる。ここでは、1854年(107頁〔注〕の1855年は誤)11月4日から翌55年3月11日まで4ヵ月滞在することになるが、この間、メアリアンはスピノザの『エチカ』を翻訳、ルイスは念願の『ゲーテ伝』を出版する。

ベルリンでは、ゲーテの伝記をすでに出版しているカール・ファルンハーゲンと、その人脈に連なる各界の名士たち——サロンの主催者である彼の妻をはじめとして、美術アカデミーの学長、作家で男爵、教授、肖像画家、俳優、彫刻家、科学者、将軍、生理学者、歌手、女優ら——に紹介される。とくに、ゾルマー嬢などユダヤ系女性が開く国際的サロンで、多士済々に遭遇する。

本書の魅力の1つである豊富な写真やイラストの中には、掲載の仕方が気になるものもある。例えば、メアリアンが、ベルリンの新美術館に入った時に、「小さな控えの間」には「『ラオコーン群像』があった」(94頁)と述べる場面である。頁の右上部に、『ラオコーン群像』とキャプションがついた写真がレイアウトされている。一瞬、こんなところにもラオコーンがあったのか、そんな筈はない、実物はバチカン美術館にしかない筈だと思った。ついでながら、同頁、『ラオコーン群像』の横に『ファルネーゼの雄牛』がある。エリオットが観ているベルリンのレプリカか、それともナポリの原物か分からない。写真やイラストには撮影時期や所蔵場所、実物かレプリカ

か、なども明記された方が良いのではないかと思う。

このような些細な点はさておき、訳者は〈解説〉で、ベルリン「回想録」のテーマを、①サロン探訪、②美術館めぐりと観劇（演劇・音楽・オペラ）、③ベルリンでの日常、の3点に絞り、当時の政治社会的背景と照らし合わせながら、詳しく読み説いていく。

3. イルフラクーム——1856年

イギリス国内約3ヵ月間の旅で、メアリアンとルイスは、1856年5月8日から6月26日までの50日はデボンシャーのイルフラクームに、その後8月9日まで南ウエールズの海辺に滞在する。ドイツの旅は連日多くの出会いと観劇、それらに対するメアリアンの過激な反応など、目まぐるしいものだったので、この海辺の町でのフィールドワーク中心の旅は、評者にとっても正直ほっとさせるものがあった。

この旅では、2人が出会い、行動を共にする人物は少ない。「イソギンチャクの収集家として噂に高い、副牧師のタグウェル氏」（131頁）や、採集した海辺の生物をロンドンの博物学用の備品販売業者に送ることを生業とするヒール氏くらいのものである。

訳者は、先に出版した『出版文化』の第3章で、〈海辺の生活から生まれたもの「イルフラクーム回想録」〉と題して論述している。そこには、ルイスの『海辺の研究』（1858）の巻頭の口絵（イソギンチャクなどの「カワイイ」生物）が載っている。ルイスとメアリアンはタグウェル氏の案内で水辺の採集に夢中になる。「イソギンチャクを見つけたぞ」（131頁）というルイスの叫び声や、狂喜乱舞する2人に、評者も刺激されて、“sea anemone George Tugwell”をネット検索すると、タグウェル氏の著書、*A Manual of the Sea-Anemones, Commonly Found on the English Coast*（1856）を飾る妖しくも美しいイソギンチャクのイラストや関連画像が飛び出してきた。知的好奇心の赴くままに寄り道を楽しむことができる。

ここで興味深いのは、イソギンチャクを見つけた時の感動をあらわす箇所訳が、『出版文化』と『回想録』では微妙に違うのである。並列してみよう。

It was a crescendo of delight when we found a “Strawberry”, and a *fortissimo* when I for the first time saw the pale fawn coloured tentacles of an *Anthea Cereus* viciously waving like little serpents, in a low tide-pool. But not a polype for a long, long while could even G. detect after all his reading; so necessary is it for the eye to be educated by objects as well as ideas. (*Journals*, pp. 265-66)

「苺（イソギンチャク）」を見つけた時、喜びは高まった（a crescendo of delight）。干潟の浅い潮溜まりに、「イソギンチャク」の淡い黄褐色の触手が小さな蛇のように揺れ動くのを見た時、歓喜は最高潮（a fortissimo）に達した。あれほど多くの本を読破したG（ジョージ）でさえ、長い間ポリプの形状を推測出来なかったのだ。知識からだけでなく、実物から学ぶことが目にとってかくも必要なのである。（『出版文化』75頁）

「ストロベリー [イソギンチャク]」を見つけた時、喜びがぐんぐんと高まった。そして浅い潮溜まりにアンシア・セレウス [イソギンチャク] の淡い黄褐色の触手が獷猛な小さな蛇のようにうねるのを初めて目撃した瞬間、歓喜は最高潮に達した。あれほど多くの書籍を読破したGでさえ、長い間イソギンチャクの形状を推測できなかったのだ。実物を見て学ぶことは、知識によって学ぶのと同じくらい、目にとってかくも肝要なのである。（『回想録』131頁）

『出版文化』では、“a crescendo of delight”と“a fortissimo”など、原語を（ ）内に入れているが、『回想録』では、日本語ですんなり読める訳になっている。単純に、訳を改善したというより、原文が重視される研究書と、読みやすさが求められる翻訳本で、それぞれに相応しい訳が採用されたのであろう。また『出版文化』では“polype”は、そのまま「ポリプ」であるが、『回想録』では「イソギンチャク」と訳されているので、より明快になっている。

〈解説〉によると、19世紀半ばは大衆の科学への関心が高まった時であり、これに目ざとく反応したルイスは水生植物の研究に転向する。彼は、書物による知識中心の研究から、実際に海辺に脚を運んで自分の目で確かめる研究

方法に切り替えたのである。

訳者は「イルフラクーム」のテーマを、①水生生物の採集 ②山野の散策 ③イルフラクームの人と文化に絞って、多岐にわたる資料—— Rosemary Ashton の *G. H. Lewes: An Unconventional Victorian* や Lynn Baber の *The Heyday of Natural History, 1820-1870*、そして J. D. Wood の *Common Objects of the Country* および *The Cambridge Companion to George Eliot* —— を駆使して論じている。

イルフラクームの旅は、メアリアンを、書物による観念的知識とは違う知の喜びへと向かわせ、小説家としての基本姿勢を体得させることとなる。訳者は、『イルフラクーム』は、メアリアンが修業時代に蓄積した観念と思想に命を吹き込み具現する創作活動に乗り出す直前の、至福の日々を綴った瑞々しい報告記である」(157頁)と結んでいる。

4. シリー諸島とジャージー——1857年

イルフラクームの旅の成果であるルイスの「海辺の研究」は、『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に連載され好評を得ていた。ルイスの水生生物研究継続のため、シリー諸島に1857年3月26日から5月11日まで、その後、ジャージー島に5月15日から7月24日まで滞在する。

〈解説〉では、まず前年8月にイルフラクームから帰宅した後の数ヵ月——メアリアンが、新人作家としての道を順調に滑り出した時期——について詳述される。メアリアンは第一作「エイモス・バートン師の悲運」を9月23日に着手、11月5日脱稿、翌日ルイスがブラックウッズ社に斡旋、翌年1月号に掲載された。12月25日に執筆開始した「ギルフィル氏の恋」はシリー諸島で完成、ジャージーでは「ジャネットの悔悟」に取り組んでいる。完成した作品は、間髪を入れず売り込むルイスの後押しで『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』に連載され、メアリアンは幸運な文壇デビューを果たすことができた。

シリー諸島では、宿の食べ物の悪さと体調不良に加えて、メアリアンは、姉クリシーの病気、さらには姪ファニーの訃報を受け、心身ともに憔悴していた。それでも2人は13冊ほどの朗読を楽しんでいる。シェイクスピアや

シェリーの詩など、定番の他に、エリザベス・ブラウニングの『オーロラ・リー』(Aurora Leigh, 1856)を2度も朗読している。おまけに、メアリアンはルイスと一緒にペンザンスの美しい自然を散策した時の描写に、『オーロラ・リー』から語句を引用している。おそらく彼女は、ロバートとイタリアに駆け落ち結婚したエリザベスに我が身を重ねたのではないか。こなれた日本語訳によって、メアリアンの心情に思いを馳せることができる。

ジャージーでは、果樹園、野生の花、牧草、牛の群れ、海辺まで続く緑など、豊かな自然の中を2人は「たっぷり時間をかけて散策し、読書に耽った」(173頁)。メアリアンは、兄姉らにルイスとの事実婚を手紙で知らせるが、それ以後彼らとは絶縁状態になる。私生活の問題で悩みの多い日々だったが、帰国後、1858年1月に2巻本『牧師たちの物語』の作家ジョージ・エリオットとして表舞台に躍り出るという意味でも「シリー諸島とジャージー」は重要な旅となった。訳者は回想録からは見えない事情も、彼女の日記や手紙から炙り出し、小説家エリオット誕生の秘話を目の当たりにしてくれるのである。

5. ミュンヘンからドレスデンへの旅——1858年

ルイスの『一般生物の生理学』執筆のための2度目のドイツ取材旅行である。1858年4月7日ミュンヘンへと旅立ち、3ヵ月滞在する。ザルツブルク、ウィーン、プラハを数日間で経由し、ドレスデンに6週間滞在、9月2日帰英の旅となる。ところが、この回想録では、ミュンヘン滞在の3ヵ月が完全に欠落しており、いきなり2人がミュンヘン駅を発つところから始まる。ルイスの主たる取材地がミュンヘンであることを考えると、記載ゼロというのは腑に落ちない。〈解説〉によると、ドイツは当時科学研究では世界一の先進国だった。ミュンヘン大学では、世界的な生理学の権威にルイスは助言を求め、共同研究もしたが、ルイスの「日記」や、ブラックウッド宛の手紙から判断して、ルイスの体調不良によるスランプがミュンヘン省略の一因と考えられる。

ミュンヘンからドレスデンへの数日間の旅の途上、美しいチロルの村を通りザルツブルクでは、モーツァルトの生家を見物、列車でリンツへ、蒸気船

でウィーンまで、プラハを経て「エルベ川のフィレンツェ」と呼ばれるドレスデンに到着・滞在する。エリオットは今回の旅でも、ベルヴェデーレ美術館、リヒテンシュタイン美術館をはじめ、多くの美術館巡りを楽しんでいる。ベルヴェデーレではティツィアーノの『ダナエ』やジョルジョーネの『ルクレツィア・ボルジア』に目を止め、ドレスデン美術館ではラファエロの『システィーナの聖母』に畏怖の念を感じるほど心酔する。ティツィアーノの手による「二人の男性の相貌を描き分けた」『献金』にいたく惹かれ、後に『ダニエル・デロンダ』で、「デロンダとモーデカイという対照的なタイプを造形する範」(210頁)とする。

一方、嫌いなものは一刀両断に斬る。レンブラントも肖像画「以外の絵はどれも好きではない」とか、『ガニュメデス』は不快きわまる(202頁)、ルーベンスの絵は、『狩猟から帰るダイアナ』の魅力的な半身像、『愛の園』、『パリスの審判』の素描以外は、どれもあまり見映えがしなかった(203頁)、ヴェロネーゼは「人物の描写にかけてはレベルが低い」(203頁)など、並み居る巨匠も作品によっては見事にこきおろされている。

エリオットの「鑑賞した作品の批評と評価に見られる特徴は、強く感銘を受けた作品を挙げて、魅力の源泉について、色彩や構図などの基本的な鑑賞ポイントを分析するが、その基準は……主観と直感を重視する印象批評である」(209頁)と、訳者は述べているが、全く同感である。

ドレスデンでの6週間は、執筆の傍ら、美術館、野外コンサート、芝居、郊外の散策などを楽しんだ。9月2日に帰宅したエリオットは、「七日に『アダム・ビード』第二巻の原稿をブラックウッド氏に送付し、一〇月二七日の今夜、旅の断片を綴ったこの回想録をちょうど書き終えるところである。第三巻の完成もそう遠くはない」と充足感の伝わる言葉で終わっている。

6. イタリア—1860年

1860年3月21日『フロス河の水車場』を完成早々、2人は3月24日イタリアへ旅立つ。イタリア旅行を終えた直後に、3ヵ月の旅の思い出を忘れないように綴り始めたのがこの回想録である。今までの5つの回想録は、いわば同時進行的に書き留められたものであった。イタリア旅行は、「手軽な物

見遊山ではなく、教養に新たな本領が生まれるかもしれないと期待を抱いて何年も待ち望んだ旅であった」。

イタリア旅行は、おそらくトーマス・クック社が企画した、交通機関を次々乗り換えて観光地を巡る旅で、エリオットは団体客として参加しているようだ。イタリア入りは、3台の乗合馬車に分乗し、ハンニバルやナポレオンのアルプス越えで有名な、雪のモン・スニ峠を橇で越えている。列車、船、蒸気船、乗合馬車、郵便馬車、驢馬等を乗り継いで、トリノ、ジェノバ、リヴォルノ、ピサを経て、ローマ（28日間滞在）、ナポリ（16日間滞在）、ポンペイ、サレルノ、アマルフィ、を経て、フィレンツェ（16日間滞在）、シエナ、ボローニャ、フェラーラを経て、ヴェネツィア（15日間滞在）、ヴェローナ、ミラノ、コモ、そして、スプルーガ峠越えでイタリアを出国するという、イタリア・グランドツアーの典型的コースである。

イタリア「回想録」の頁を飾る約50枚の絵画、彫刻、歴史建造物の写真などを観ながら、この名訳を追っていると、気が付けば、エリオットとルイスに同行してヴァーチャル・ツアーを楽しんでいる自分がいた。

ここでは、①英語以外の外国語の和訳の表記の仕方 ②歴史建造物や美術品に関する著者エリオットの誤りと訳者による訂正、という観点から検証する。

①このツアーには多国籍の乗客がいる。厳寒の中で身震いしている小柄なフランス人青年を見て、巨漢のフランス人兵士が、「カオガハレテルゼ」“Your face is swelled”と言う。「アア、ヨクワカッテル」“Ah, je le sais bien”（217頁）とフランス人青年が答える。フランス人同士だからフランス語を喋っていると思いきや、英語とフランス語である。また、偶然ジェノバまで同じ列車に乗り合わせた、プリンス・カリニャンを見て、エリオットは、如何にもプリンスらしい風貌を描写した後、「サテ、プリンスノワダイハヒトマズオワリニシヨウ」（218頁）と独白する。原文はイタリア語である。

もう一例、見よう。長時間かかる「検閲」手続きにうんざりしたイタリア在住の博物学者が、「アアイッタグコウヲアラタメナイカギリ、ニンゲンモオワリデスナ」（225頁）と言う。イタリア語ではなく、フランス語である。英語以外の外国語は、全てカタカナ表記になっているので、何語を話してい

るのか分からない。翻訳だからどうでもいいことかもしれないが、やはり気になる。では、分かるような表記方法はあるのか、無責任だが正解がない。今、評者にできることは、「回想録」全編に散見される英語以外の複数の外国語の翻訳という厄介な難作業を終えられた富田氏のご苦勞に敬意を表すだけである。

②ここでは、訳者によるエリオットの誤り訂正の数例を以下に羅列する。訳者の如何にも研究者らしい資料検証の徹底ぶりをご覧ください。著者エリオットの誤 → 訳者による訂正のように表記する。

1. フィレンツェの大聖堂内部にある、ミケランジェロの彫刻について、エリオット曰く「イエスの遺体を支えるアリマタヤのヨセフ、片方にイエスの母マリア、もう一方に天使らしき姿を彫った群像」 → 「聖母マリアが右、左はエリオットの言う天使ではなくマグダラのマリアと言われる」(260 頁)
2. 「オルカーニャのランツィ回廊 → 「[オルカーニャの] とするのは間違いで、実際はベンチ・ディ・チョーネとフランチェスコ・タレンティが建設」(262 頁)
3. 『アイアスの遺体を抱きかかえるギリシャ人兵士』 → 「『パトロクロスを抱きかかえるメネラウス』のことと思われる」(262 頁)

イタリア旅行中、エリオットは日記をつけていないので、〈解説〉では、旅の途上エリオットがブラックウッドや親友のコングリーブ夫人等と交わした手紙やルイスの「日記」を手懸りに、イタリア旅行が読み解かれる。ローマの旅が、『ミドルマーチ』において様々な形で具現したことが詳述されているのは言うまでもない。フィレンツェでは、ルイスが歴史小説の創作を思いつき、これに賛同したエリオットが、ブラックウッド宛ての手紙で「新しいアイデア」(303 頁)を具体化する意気込みを示したことなどが書かれている。「旅のお陰で新しいアイデア」がひらめいて新たなる「人生の岐路」(304 頁)に立っていることを伝えるセアラ宛ての手紙も含めて、日記や手紙が、旅のもつ力を浮彫にする。

「見聞を広め教養修得に深く貢献したイタリアの旅であった」が、とりわけ、フィレンツェの旅では、その「歴史とルネサンス美術に触発されたエリオット」が、歴史小説『ロモラ』の着想を得たことで、冒頭に掲げた「新しい本領の獲得」(304頁)という目標を見事に結実させたのである(概略)と、富田氏は総括した後、「翌一八六一年四月、エリオットは再びフィレンツェへ向かい、約二ヶ月滞在して取材と調査に専念し一〇月七日より『ロモラ』の執筆を開始する」という言葉で〈解説〉を結んでいる。

『回想録 ヨーロッパめぐり』を読み終えた今、綺羅星のごとき人脈、訪問先の各界の名士、その地の自然、人々の生活や文化遺産等々との出会いをもたらした旅、旅こそが、メアリアンがエリオットとして誕生し、巣立っていく揺籃となったことを、評者は追認した。最後に、名訳と、細密な視線による〈解説〉のお蔭で、田園小説や歴史小説など多くの傑作を遺した偉大な作家エリオットの源流に触れた心地にさせてくれた富田氏の労作に心から敬意を表したい。

**Dermot Coleman, *George Eliot and Money: Economics, Ethics
and Literature***

(Cambridge Studies in Nineteenth-Century Literature and Culture)

(Cambridge UP, 2014), vii+ 226 pp.

中島 正太

2020年1月29日の欧州議会で、議長をつとめたウルズラ・フォン・デア・ライエン欧州委員会委員長は、EUを離脱するイギリスに送る言葉として、ジョージ・エリオットの *Felix Holt, the Radical* 第44章から「われわれは別れの苦しみの中でのみ、愛の深さを見つめる」という一節を引用した。EUと言えば人の流れとともに経済の流れもつかさどる重要機関であり、その中でエリオットの言葉が引用されるのはやや不思議に思われるかもしれない。しかし、精緻な心理描写と人間への洞察に加え、エリオットには経済、とくにお金への並々ならぬ関心があったことはたとえば *The Mill on the Floss* などを読めば明らかであろう。この *George Eliot and Money: Economics, Ethics and Literature* はまさしく、そういったエリオット文学におけるお金に象徴される経済のありかたについての論考である。エリオットと経済を関連づけた論考は今までもいくつか見られたが、1冊の研究書として包括的に論じられたのは、少なくとも本書が出版された2014年の時点では初めてと断言していいかもしれない。

著者の Dermot Coleman はオックスフォード大学を卒業後、投資関連のアナリストとして活躍し、1998年には SISU Capital という投資会社を設立、実業家としての地位を確立しており、本書は著者が2011年、エクセター大学に提出した博士論文をもとにしたものである。イントロダクションで著者はこの研究を立ち上げるきっかけとなったのが“our own century’s financial crisis” (p. 4) であったと述べているが、これが2008年のリーマン・ショックであることは明らかであろう。その後、2009年に彼がフィナンシャル・タイムズで読んだ記事には「(リーマン・ショックの問題については)現代のビジネス関係の論考よりもジェイン・オースティンの小説のほうが多くの

ことを教えてくれる」(p. 4)とあり、その記事をきっかけに「19世紀中期、および後期のリアリズム小説家は、同時期に発展していた貨幣経済に対する批評家としても機能していた」(p. 2)と考えるようになる。この時代の金銭問題を扱った小説は、「倫理学と経済学の相互的な関係を探求して」(p. 3)おり、このような問題を考察する際は、ディケンズやトロロープの作品が取り上げられることが多かった。しかしコールマンはジョージ・エリオットこそこういった問題に照らし合わせて考えるべき作家である、ととらえて論考をすすめてゆく。この際の著者の指摘で興味深いものは「エリオットの作品にはお金をめぐる問題が無数の層に渡って沁み込んでいる」(p. 3)という地質学的な比喩を使った表現だ。ディケンズやトロロープほどあからさまではないが、よく読めばお金の問題があちこちに見えてくる、という、エリオット文学の特色をうまくとらえているように感じられる。

さて、本書の構成について確認してみよう。著者自身も述べているように、最初の3章はエリオットの伝記的な要素を分析したものである。それによると、エリオットはハリエット・マーティノーのような一般的に人気のあった書物からアダム・スミスやジョン・スチュアートといった専門家による論考を経て、経済に関する知識をしっかりと身につけていた。

そして小説家として活動後、1860年頃までにエリオットの資産は急速に増え、株式などの投資を行うことで、株の価格の上昇、下降がいかにか社会問題と密接に関わっているかを身にしみて感じるようになり、これが後の彼女の作品に複雑さと広がりを与えている要因の一つである、と結論づけている。

後半の5章では *Felix Holt*、*Middlemarch*、*Romola* といった作品がとり上げられている。第5章における *Middlemarch* の分析では、自分を恐喝するラッフルズを亡き者にしたいという欲望、これを理性で正当化させようとするバルストロウドと、直感でそのバルストロウドの元で働くことをやめてしまうケイレブ・ガースを対比させて論じている。コールマンはバルストロウドをフェザーストーンやカソーボンに連なる人物としてとらえており、その共通点はお金の力で他人を意のままにしようとするところであると結論付けている。これは、自らの経済状況を顧みることなく判断を下したケイレブ・ガー

スとその娘メアリー、またカソーボンからの遺産を放棄してラディスローと結婚したドロシアと対照的であるが、お金に対する態度が自らの人生に影響している、という点では両者とも共通していると言えるだろう。また、ヴィンシー家の長男であるフレッドは、ルーズな金銭感覚を持っているというイメージでとらえられがちであるが、コールマンはフレッドがケイレブからの借金を（返す当てがないので）断ったことに着目し、その判断力を評価している（p. 95）。このことが、バルストロウドからの融資を断り切れなかったリドゲイトとの明暗を分けたのであろう、ということは想像に難くない。

ただ、このように「自らの金銭的状况を顧みず、自分の意志で人生を選ぶ」キャラクターとして真っ先に浮かぶのが、*Silas Marner* のエピソードではないかと思うのだが、本書ではほとんど分析されていない。できれば次回のコールマンの著作では、この *Silas Marner* におけるエピソードについての論考を読みたいと考えるのは評者だけではないだろう。

エリオット作品と19世紀当時のイギリス経済を関連づける際に、ある意味もっとも縁遠いと考えられるのが、15世紀末のイタリアを舞台とした *Romola* であるが、コールマンはこの作品にも1章を割いて分析を行っている（第7章）。彼はまず、メディチ家を中心とした金融業の発展、およびフィレンツェにおける複式簿記といった技術の普及が15世紀末のイタリアに成熟した資本主義経済をもたらしていた、と指摘する（p. 132）。そしてそのイタリアの様相が経済的にも社会情勢的にも19世紀のイギリスと似通っていたことをふまえた上で、ティート・メレーマをめぐる金銭問題について論じている。自らの野心のために利用できるものは何でも利用する、というイメージが強いティートであるが、たとえば義父バルダッサーレの宝石を売る場面では、売ったお金でリスクを冒して養父を助けようとするよりも、そのお金を自分のために使う方が有益だという考えを示しており、その根底には、最大量の喜びを引き出すこと（to extract the utmost sum of pleasure）こそが人生の目的、という考え方がある、とコールマンはとらえている（p. 137）。ここでの sum という言葉の使い方がまさに経済的であるということで、この論考においてティートは15世紀末の成熟した経済状況の中において、19世紀的な価値観と照らし合わせても一歩先に進んだ個人主義を体現して

いる、と結論づけられている。

さて、ここまでの紹介を読んできた読者の中には、先ほど評者が、本書で論じられているものとして言及したエリオット作品の中になぜ *The Mill on the Floss* が入っていないのか、と不思議に思われた方もおられるだろう。たしかに同作は本書において独立した章を設けて論じられてはいないが、本書の様々なところで言及され、分析されている。というのも、コールマンはこの *The Mill on the Floss* が出版された 1859 年こそが、エリオットの財政状況を大きく変化させた年だとし、また著者として編集者との関係も一変させた年であったと考えているからである (p. 10)。*The Mill on the Floss* はジョージ・エリオットの自伝的要素を多く含んだ作品として知られているが、この作品そのものが小説でお金を稼ぐ、職業作家としてのエリオットにとって決定的なターニング・ポイントとなったことに著者はより重きを置いているように感じられる。そういう意味で、本書において *The Mill on the Floss* は、それを単独で論じた章が含まれないゆえに、かえってエリオットの他の諸作品と比較しても「別格」と見なされていることが伝わってくる。

コールマンがジョージ・エリオットとお金を関連づけた研究において *The Mill on the Floss* がとりわけ重要と見なしているもうひとつの証拠は、本書につけられた付録の 2 つ目 (Appendix B) であろう。この Appendix B では、*The Mill on the Floss* におけるマギーの父、タリバー氏の財政破綻に関する分析が行われている。著者はこの財政破綻が物語の展開においてもたいへん重要な意味を持っているにもかかわらず、その詳細がやや不透明であることに着目し、作中からタリバーの資産と負債を丁寧に読み取ったうえで、当時のイギリスの破産法に照らし合わせても、タリバーはむしろ破産を避けるための交渉を行っていた、と考えるのが妥当であると結論づけている (p. 165)。たしかに、ここで検証されている原作からの引用箇所を丁寧に読むと「破産と同じようなもの」「破産を意味する、と考えた」(p. 165) など、全知の語り手が、明らかにこれが破産ではないことを知りながらミスリーディングを行っているように思えてくる。ではなぜ、作者エリオットはこのようなミスリーディングともとられるような書き方をしたのだろうか。コールマンは「エリオットが財政を中心とした物語展開から、感傷的なプロットに読者を

誘導するため」(p. 160) という他の評者の意見を紹介してはいるが、彼自身が読み取った作者の意図は、少なくともこの Appendix B においては述べられていない。機会があれば、エリオットのこの作為について、コールマン自身の見解を訊いてみたいところである。

本書の謝辞によるとコールマンは、オックスフォード大学の入学試験でジョージ・エリオットに関するエッセイを書いた際、エリオットの綴りを終始間違えて書いてしまったそうである。それでも入学を許可してくれた同大学の教員に著者は感謝の意を表しており、そこからユーモアにあふれた彼の人柄が伝わってくる。しかし実業家としての経験もふまえた上での著者の分析は非常に精緻で深いものがあり、またこの書評ではあまりふれられなかったが、カント、デュルケームと言ったエリオットの時代とはやや前後する哲学者の著作も視野に入れ、まさしく人文・社会をまたいだ縦横無尽な論考を完成させた、と言える。

先述のように、コールマンはこの研究のきっかけがリーマン・ショックであったとしているが、この書評をしたためている 2020 年、まさにコロナウイルスによって全世界の経済状況が大きく変わろうとしている。そのような中、一筋の光を見出す手立てとしてジョージ・エリオットの諸作品が機能するような、そういった論考を今後の著者には期待したい。

日本におけるジョージ・エリオットの文献(2018年8月～2020年7月; 2000年1月～2018年7月の補遺・訂正)

・発行年月日に*印を付したものは、前号までの文献(2000年1月～2018年7月)の補遺・訂正分です。

なお、訂正分に関しては()内に→印を用いてその訂正箇所を明示してあります。

(1) 翻訳関係(エリオットの著作)

発行年月日	訳者名等	タイトル等	書名、雑誌・学会誌名等	巻号、発行所、頁等
*2013.08.30 (平成 25年)	柴田元幸編・ 訳	ミドルマーチ	書き出し「世界文学全集」	河出書房新社、pp. 47-49; 初出は『文藝』第48巻第4号(河出書房新社、2009.11.01)の連載「書き出して読む『世界文学』 第二回 英米女性作家」篇
2018.08.30 (平成 30年)	ジョージ・エリオット著、三島伸編訳	剥かれたベール	ヴァクトリア朝怪異譚	作品社、pp. 91-15; 「訳注」、pp. 307-09; 解題「ジョージ・エリオットと『剥かれたベール』」(pp. 317-21)
2018.09.28	富田成子	「序」ジョージ・エリオットと旅、「ワイマール」一八五四年、「ベルリン」一八五四年、「シリ」諸島とジャージー」一八五六年、「ミュンヘンからドレスデンへの旅」一八五八年、「イタリヤ」一八六〇年、「文献・あとがき」、各章に「解説」付き	回想録 ヨローロッパめぐり	彩流社、310 pp.
2019.01.20 (平成 31年)	廣野由美子		ミドルマーチ 1	光文社古典新訳文庫、光文社、534 pp.; 「プレリュード」、「第一部 ミス・フルツク」、「第二部 老いと若さ」(pp. 6-494); 「読書ガイド」(廣野由美子、pp. 496-534)
2019.08.09 (令和元年)	奥村真紀	「サイラス・マナーナーラヴィロウの織工」	『サイラス・マナーナーラヴィロウの織工 付ジョージ・エリオットの伝』(ジョージ・エリオット全集 4)	彩流社、243 pp.; 「サイラス・マナーナーラヴィロウの織工」(奥村真紀訳、pp. 1-196)、『サイラス・マナーナーラヴィロウの織工』(内田能嗣、pp. 197-208)、『ジョージ・エリオットの伝』(pp. 209-34)、『ジョージ・エリオットの伝』(清水伊津代、pp. 235-43)
2019.08.09	清水伊津代	「ジョージ・エリオットの伝」	『サイラス・マナーナーラヴィロウの織工 付ジョージ・エリオットの伝』(ジョージ・エリオット全集 4)	彩流社、243 pp.; 「ジョージ・エリオットの伝』(pp. 209-34)、『ジョージ・エリオットの伝』(pp. 235-43)

2019.09.20	小尾英佐	サイラス・マーナー	光文社古典新訳文庫、光文社、383 pp.	「サイラス・マーナー」(「第一部」、「第二部」、「結び」、pp. 5-349)、「解説」(富田成子、pp. 350-73)、「ジョージ・エリオット年譜」(pp. 374-79)、「訳者あとがき」(pp. 380-83)	発行所、頁等
2019.11.20	廣野由美子	ミドルマーチ 2	光文社古典新訳文庫、光文社、475 pp.	「第3部 死を待ちながら」(pp. 7-201)、「第4部 三つの愛の問題」(pp. 204-433)、「読書ガイド」(pp. 434-75)	大阪教育図書、pp. 53-172、196-253.
2020.03.20 (令和2年)	荻野昌利	ミドルマーチー ある田園生活の研究 編	大阪教育図書、vi+649 pp.	「はじめに」(pp. iii-iv)、「目次」(pp. v-vi)、「ブレイユード」(序章) (pp. 1-6)、「第一巻」～「第四巻」(pp. 7-649)	大阪教育図書、pp. 53-172、196-253.
2020.03.20	荻野昌利	ミドルマーチー ある田園生活の研究 編	大阪教育図書、iv+642 pp.	「目次」(pp. iii-iv)、「第五巻」～「第八巻」(pp. 1-606)、「フィナーレ(終章)」(pp. 607-20)、「解説」(pp. 621-32)、「作中主要人物紹介」(pp. 633-36)、「使用テクニクス」(pp. 637-38)、「あとがき」(pp. 639-40)、「訳者略歴」(pp. 641-42)	大阪教育図書、pp. 53-172、196-253.
2020.07.20	廣野由美子	ミドルマーチ 3	光文社古典新訳文庫、光文社、495 pp.+1 p. [編集部]	「第5部 死の手」(pp. 7-232)、「第6部 未亡人と妻」(pp. 233-453)、「読書ガイド」(pp. 454-93)	大阪教育図書、pp. 53-172、196-253.

(2) 研究書関係 (研究書の一部として収められているものも含む)

発行年月日	著者名等	タイトル等	書名等	発行所、頁等
2018.10.11 (平成30年)	原 公章	「第二部 ジョージ・エリオット、ほかをめぐって」の中の「Silas Marnerの「近視」と「強硬症」、「解雇という病」→Silas Marnerの一面」、「『ロゼラ』ー現在の時空」、「『ミドルマーチ』における「心筋拡大」、「Daniel Deronda 論」→Gwendolen Harlethの結婚をめぐって」、「ジョージ・エリオットとジョージ・ヘンリー・ルイス」→Problems of Life and Mind IV.VにおけるFeelingとDuty」、「ワイルター・スコットの小説におけるダーク・ヒロイン」及び「ターシャス・リドゲイト(ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』『英語青年』のアンケート「この人物がいい」に込めて)」、「第三部 最終講義」;「第4部 書評と推薦の言葉」の中の「荻野昌利「歴史を〈読む〉」ーヴァイクトリア朝の思想と文化」、「Bernard J. Paris, <i>Revealing George Eliot, Changing Responses to Her Experiments in Life</i> 」及び「Masayuki Terasishi, <i>Polyphony in Fiction: A Stylistic Analysis of Middlemarch, Nostramo, and Herzog</i> 」	英文学と教養のために →Further Salmagundi	大阪教育図書、pp. 53-172、196-253.

2019.07.20 (令和元年)	天野みゆき	第4章 ジョージ・エリオット 『ダニエル・デロンダ』における恐怖と苦悩の展開 —『ヴァレット』を発展させた物語	春風社、pp. 65-82.
2020.03.30 (令和2年)	金子幸男	コナー・イングリッシュ、ジョージ・エリオット 『サイラス・マーナー』における老いの表象	開文社、pp. 15-60.

(3) 概説書関係 (事典・辞典、文学史、文化史等およびエリオットへの言及がなされている論文等を含む)

発行年月日	著者名等	タイトル等	書名等	発行所、頁等
*2009.11.10 (平成 21年)	伊吹知勢	ジョージ・エリオット サイラス・マーナー	加藤光也解説・立野正裕編『イギリス文学：名作と主人公』(立野政裕→立野正裕編)	自由国民社、pp. 106-08.
*2014.06.04 (平成 26年)	クリストファー・ベルトン著、渡辺順子訳	「Art and Literature 芸術と文学」、「Wisdom 知恵」、「Despair 絶望」、「Evil 悪」、「Jealousy 嫉妬」、「Loneliness 孤独」、「Regret 後悔」、「Sorrow 悲しみ」、「Children and Childhood 子どもと子ども時代」、「Music 音楽」、「Destiny 運命」、「Secret 秘密」、「Vanity 虚栄心」、「Education 教育」、「Imagination 想像力」、「Success 成功」、「Human Nature 人間性」、「Woman 女性」	世界文学の名言	IBCパブリッシング株式会社、pp. 23, 59, 67, 68, 73, 75, 82, 83, 84, 88, 96, 103, 120, 135, 160, 189, 196, 201, 211, 245, 272, 291.
*2016.06.01 (平成 28年)	研究社編集部編、三瓶望美筆記体	33 サイラス・マーナー	英語の名文をなぞる〈筆記体〉練習帳	研究社、pp. 70-71.
*2017.05.10 (平成 29年)	ジェイムズ・マヤントンほか著、日本語版監修 沼野充義、越前敏敬訳	「ひとつの問題をさまざまな立場から見ることができないうのは、了見がせまいからだ」『ミドルマーチ』(1871年～1872年) ジョージ・エリオット』、『ダニエル・デロンダ』(1876年) ジョージ・エリオット』	世界文学大図鑑	三省堂、pp. 182-83, 200; 他に pp. 109, 119, 128, 129, 130, 156, 174, 175 においてエリオットに言及
2018.08.08 (平成 30年)	高野秀夫	「第四章 イングリランド中部」の「ハ ジョージ・エリオットの町 ナニートン」	宇野 毅・市川 仁・石原 孝哉、伊澤東一編著『田園のイングリランド：歴史と文学でめぐる四八景』	彩流社、pp. 165-68.

2018.08.10	高野秀夫	34 町が世界に誇る女性作家 — ジョージ・エリオット	石原孝哉、市川 仁編著『イギリス文学を旅する 60 章』(エリア・スタディーズ 167)	明石書店、pp.218-22.
2019.08.05 (令和元年)	ピーター・ヒューム監修、藤藤孝日本語訳監修	ジョージ・エリオット	図鑑 世界の文学者	東京書籍、pp.104-105; エリオットの肖像 (p.104); 他に p.97 においてもエリオットに言及

(4) 新聞、雑誌 (学会誌、紀要類) 等

発行年月日	著者名等	タイトル等	雑誌・学会誌名等	巻号、発行所、頁等
*2009.03.31 (平成 21 年)	加藤雅之	12 年ぶりに「とぼりの彼方 (The Lifted Veil)」を読み直す	Kobe Miscellany	No. 32、神戸大学英米文学会、pp.43-58.
*2012.03.01 (平成 24 年)	吉田一穂	『サイラス・マーナー』における自己と他者	近畿大学教養・外国語教育センター紀要・外国語編	2 巻 2 号、pp. 13-23.
*2012.05.30	阿部美恵	19 世紀イギリス女性作家と異文化 — エリザベス・ギヤスケルとジョージ・エリオットを中心に —	文化教育研究所 平成 22・23 年度研究年報	第 3 号 (平成 22・23 年度合併号)、松蔭大学文化教育研究所、pp. 41-45.
*2014.09.05 (平成 26 年)	谷 綾子	自由という名の牢獄、義務という名の解放	龍谷理工ジャーナル	Vol. 26-2、龍谷大学理工学会、pp. 17-21.
*2015.08.24 (平成 27 年)	阿川大樹	ことば遍路	徳島新聞	第 25667 号、日刊、徳島新聞社、p.6; 「スベインのジプシー」からの一節 (ことばは翼を持つが、思うところに飛ばない) (The Spanish Gypsy; Book 3) が引用されている (p.6).
*2016.01.03 (平成 28 年)	阿川大樹	ことば遍路	徳島新聞	第 25796 号、日刊、徳島新聞社、p.7; エリオットの言葉として「空の星になれないなら、せめて家庭の灯にならなさい」が引用されている (p.7).
*2016.05.27	阿川大樹	ことば遍路	徳島新聞	第 25940 号、日刊、徳島新聞社、p.7; エリオットがミセス・エドワード・バーンズに宛てた手紙 (1857.05.11) の一節「わたしは愛されたい。それだけではなく、それを口に出して伝えてもらいたい」が引用されている (p.7).

*2018.01.31 (平成30年)	溝口 薫	19世紀中期までの英国女性教育論の展開と女性の自律について(2) エリオットを訳すー翻訳論から見え てくる風景ー	神戸女学院大学教職セン ター研究紀要	第1巻第1号、神戸女学院大学教職センター、pp. 47-55.
2018.12.01	山本史郎	ストランド中街の出版文化史	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 1-18.
2018.12.01	中島俊郎	小説を読むことは「危険」か？ー『フ ロス河の水車場』におけるヒロイン の読書を検証するー	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 19-39.
2018.12.01	中島正太	小説を読むことは「危険」か？ー『フ ロス河の水車場』におけるヒロイン の読書を検証するー	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 41-54.
2018.12.01	Nana Yano (矢野奈々)	George Eliot's Dark Heroine—Gwendolen Harleth: Devotion from the “Angel in the House” and the Pursuit of a New Femininity	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 55-67.
2019.02.28 (平成31年)	吉田一穂	<i>Daniel Deronda</i> —デロンダによるゲ ンドレンへの精神的感化とユダヤ教 への理解ー	人間文化研究	第10号、桃山学院大学総合研究所、pp. 17-40.
2019.05.20 (令和元年)	永富友海	波及するセンセーションナリズムー『ダ ニエル・デロンダ』への一遺稿	英国小説研究	第27冊、英宝社、pp. 29-71.
2019.11.22	Midori Uematsu	A Story of Janet, Mrs. Robert Dempster in <i>Scenes of Clerical Life</i>	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 9-24.
2019.11.22	Hiroshi Oshima	Mr. David Faux, Corrupt Confectioner : George Eliot and Commercial Societies	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 25-49.
2019.11.22	Nanae Hama	Adaptations of “Inkle and Yarico” and Shattered Colonial Illusions in “Brother Jacob,” <i>Felix Holt, the Radical</i> and <i>Daniel Deronda</i>	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 51-72.
2019.11.22	Maho Sakoda	“Two creatures slowly turning to marble” : Sculpturesque Images in George Eliot’s <i>Middlemarch</i> and Edward Burne-Jones’s Painting	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 73-95.

2019.11.22	Shimetsu Fukunaga	A Vision of George Eliot's Ethical Humanism in the Portrayal of the Bulstrodes in <i>Middlemarch</i>	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 97-121.
2019.11.22	Hiroshi Ebine	"These Things Are a Parable": Realism and Beyond in George Eliot's Later Fiction	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 123-45.
2019.11.22	Eni Satoh	The Actress of Real Drama: Gwendolen's Self in Everyday Performance	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 147-70.
2019.11.22	Yohko Nagai	The Revelatory Mask: Eliot's Essays and Impressions of <i>Theophrastus Such</i>	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 171-94.
2020.01.14 (令和2年)	窪田憲子	『ロモラ』の二つの視座ー歴史ロマンスとして、トラヴェルライティエタとして	文学研究	四十号、『文学研究』同人、pp. 119-44.
2020.02.01	向井和美	読書会という幸福 (2) 『サイラス・マナー』(ジョージ・エリオット)の読書会	世界	2月号、第九二九号、岩波書店、pp. 247-49.
2020.03.30	秋山 義典	成熟のレトリックと新しい経済活動ージョージ・エリオット『フロス河の水車場』	文学研究論集	第38号、筑波大学比較・理論文学会、pp. 1-17.

(5) 書評・新刊紹介関係

発行年月日	書評者名等	タイトル等	掲載雑誌名等	発行所、頁等
*2005.09.01 (平成17年)	原 公章	荻野昌利著『歴史を〈読む〉ーヴィクトリア朝の思想と文化』	英語青年	9月号、第151巻第6号、研究社、pp. 46-47.
2018.12.01 (平成30年)	富田成子	Fionnuala Dilliance, <i>Before George Eliot: Marian Evans and the Periodical Press</i> (Cambridge: Cambridge University Press, 2013), ix+270 pp.	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 69-80.
2018.12.01	堀 紳介	J. Hillis Miller, <i>Reading for Our Time: Adam Bede and Middlemarch, Revisited</i> (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2012), 191 pp.	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 81-86.

2019.06. (令和元年)	新刊書等のご案内	George Eliot Newsletter of Japan	第23号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 10-11.
2020.03.31 (令和2年)	新井景子 Maya Higashi Wakana 著 Performing Intimacies with Hawthorne, Austen, Wharton, and George Eliot: A Microsocial Approach	アメリカ文学研究	56号 (日文号)、日本アメリカ文学会、pp. 81-87.
2020.06.30	新刊書等のご案内	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 8-9.

(6) 翻訳文献関係 (研究書、論文等)

発行年月日	著者名、訳者名等	タイトル等	書名等	発行所、頁等
*1997.12.10 (平成9年)	ハンス・マイヤー 著、宇京早苗訳	「ユディットとデリラ」の「IV 選択としてのブルジョアの履歴」の中の「2 ジョージ・エリオットあるいは規律に服させること」及び「シャイロック」の中の「ブルジョア小説におけるユダヤ人の登場人物」の中の「4 デロンダ、あるいはシオニズムの変形 (ジョージ・エリオットの小説『タニエル・デロンダ』)」	アウトサイダー：近大ヨローツハハの光と影	講談社学術文庫、講談社、pp. 163-172, 656-63；他に pp. 62, 120, 126, 157, 160-61, 174, 177, 180, 182-83, 193-94n7, 420, 683nn8-11.

(7) 注釈書、注付き教科書関係

・なし

(8) その他 (ニュースレター、書誌等)

発行年月日	著者名等	タイトル等	雑誌・学会誌・書名等	発行所、頁等
*2016.09.16	谷 綾子	Middlemarch における父への反逆：Casaubon の子供たち	雑誌・学会誌・書名等 第88回大会 Proceedings	日本英文学会、pp. 227-28.
*2018.03.10 (平成30年)	佐藤エリ	「視覚」・「想像力」・「言語」がなくなぐももの；George Henry Lewes の議論を通して Adam Bede を読む	第90回大会資料	日本英文学会、p. 34.
*2018.04.01	塩谷清人	ハーディのこだわり	日本ハーディ協会ニュース	第83号、日本ハーディ協会、pp. 1-2；エリオットへの言及は p. 2.

*2018.06.	原 公章	追悼 一 小野寺健先生、A Man of Good Sense	英文学会通信	第 109 号、日本大学英文学会、pp. 4-5.
2018.09.15	松本三枝子	<i>Daniel Deronda</i> と Benjamin Disraeli	2018 年度支部大会資料統合版	日本英文学会、pp. 47-48.
2018.09.15	佐藤エリ	自己を演じる一『ダニエル・デロンダ』におけるグ ラフェントリンをめぐって一	2018 年度 支部大会資料 統合版	日本英文学会、p. 72.
2018.09.15	佐藤エリ	「視覚」・「想像力」・「言語」がつなぐもの：George Henry Lewes の議論を通して <i>Adam Bede</i> を読む	第 90 回大会 Proceedings	日本英文学会、pp. 49-50.
2018.12.01	大嶋 浩	書誌文献データベース：日本におけるジョージ・エリオッ トの文獻 (2017 年 7 月～2018 年 7 月；2000 年 1 月～ 2017 年 6 月の補遺・訂正)	ジョージ・エリオット研究	第二十号、日本ジョージ・エリオット協 会、pp. 87-90.
2019.06. (令和元年)	海老根 宏	原先生：お別れの言葉	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、p. 1.
2019.06.	植松みどり	原公章先生との心残りなお約束のこと	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、p. 2.
2019.06.	内田能嗣	誠実な先生	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、p. 2.
2019.06.	福永信哲	原公章先生を偲んで	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、pp. 3-4.
2019.06.	永井容子	原公章先生を偲んで	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、p. 3.
2019.06.	堀 紳介	原公章先生との思い出	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、p. 3.
2019.06.	濱 奈々	日本ジョージ・エリオット協会 第 22 回大会報告記	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、pp. 3-4.
2019.06.	池園 宏	日本ジョージ・エリオット協会 第 22 回大会シンポジ ウム『「サイラス・マーナー」の授業研究』	George Eliot Newsletter of Japan	第 23 号、日本ジョージ・エリオット協 会、pp. 4-5.
2019.11.22	John Burton	A Bicentenary Message from the Chairman (UK)	ジョージ・エリオット研究	第二十一号、日本ジョージ・エリオット 協会、pp. 1-3.

2019.11.22	Shimeitsu Fukunaga 堀 紳介	Foreword 自然風景が示す共感の“sign”―Jane Eyre と Maggie Tulliver の視覚的能力	ジョージ・エリオット研究 Bromé Newsletter of Japan	第二十一号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 5-7. 第100号、日本ブロンテ協会、p. 3.
2020.04.01 (令和2年)	窪田憲子	広がりゆくエリオットの世界	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 1-2.
2020.06.30	奥村真紀	George Eliot 2019: International Bicentenary Conference 報告	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 2-3.
2020.06.30	谷 綾子	日本ジョージ・エリオット協会 第23回全国大会報告記	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、pp. 3-4.
2020.06.30	富田成子	日本ジョージ・エリオット協会 第23回全国大会シンポジウム: ジョージ・エリオットと旅 ―‘Recollections’を読む	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、p. 4.
2020.06.30	谷田恵司	‘The Lifted Veil’ とジョージ・エリオットの旅	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、p. 5.
2020.06.30	関田朋子	イルフラクームでの体験と博物学	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、p. 5.
2020.06.30	富田成子	‘Recollections of Italy 1860’ と <i>Middlemarch</i> (19-22章)	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、p. 5.
2020.06.30	田村真奈美	イタリアー ジョージ・エリオットのグラウンド・ツア―	George Eliot Newsletter of Japan	第24号、日本ジョージ・エリオット協会、p. 5.

* 記事事項の間違い、遺漏等にお気づきの方は、文献委員の代表（大嶋）までお知らせください。

Corrigenda (前号の正誤表)

前号 (第二十一号) の p. 39 の Fig. 1、p. 40 の Fig. 2 と Fig. 3 のキャプションに誤植等がありました。以下のように訂正願います。

Fig. 1. “The Use of Adulteration.” *Punch*, vol. 29, 1855, p. 47.

Fig. 2. “The Great Lozenge-Maker.” *Punch*, vol. 35, 1858, p. 207.

Fig. 3. “Sample of Coffee Adulterated with Both Chicory and Roasted Wheat” (microscopic image). Hassall, *Adulterations*, Fig. 30, p. 127.

『ジョージ・エリオット研究』(*The George Eliot Review of Japan*)
投 稿 規 定

1. 投稿者は原則として日本ジョージ・エリオット協会会員であること。
2. 論文は未発表のものであること。ただし、すでに口頭発表し、その旨明記している場合は、審査対象とする。
3. 投稿原稿は、原則として Microsoft Word で作成し、A4 用紙に横書きしたものとす。

日本語論文の場合は A4 用紙 35 字×30 行で 14 頁以内。英語論文の場合 6,000 語以内 (ネイティヴチェックを受けることを推奨する)。なお、日本語論文には必ず英語のシノプシス (300 語程度) を添付すること。日本語論文、英語論文とも、題名、注、引用文献、図版、その他一切を規定文字のうちに収めることとする。また、図版等は、挿入箇所と大きさを原稿の中で指定すること (例: 原稿の p. 5 に 20 字×25 行の大きさを図 1 を挿入)。

以上の点をチェックシートに記入し、確認する (チェックシートの詳細については <http://www.g-eliot.jp/tokokitei.new.pdf> 参照)。

4. 論文 1 部とチェックシート 1 部を、添付ファイルで、日本ジョージ・エリオット協会事務局 (georgeeliot.japan@gmail.com) に送付する。
5. 書式上の注意
 - イ. 原則として、日本語は MS 明朝、英語は Times New Roman を使用。
 - ロ. タイトルは 14 ポイントで太字、章題は 12 ポイントで太字、氏名・本文・注・引用文献等は 12 ポイント、独立引用文は 11 ポイントとする。
 - ハ. 注と参考文献は、それぞれ分けて原稿末尾にまとめて付けること。
 - ニ. 外国人の人名、地名、書名等は少なくとも初出の箇所で原名を書く。
 - ホ. その他、書式の細部に関しては、原則として、*MLA Handbook*, 8th edition、あるいは『*MLA ハンドブック 第 8 版*』(秀和システム、2017) に準ずる。「原稿見本」(<http://www.g-eliot.jp/ronsyu.htm>) 及び「引用文献見本」(<http://www.g-eliot.jp/ronsyu.htm>) を参照。

6. 住所・電話番号・メールアドレス、その他をチェックシートに記入する。
7. 原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
8. 原稿の締切日は4月1日（厳守）とする。
9. 執筆者の校正は初校のみとする。校正は植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は原則として認められない。
10. 掲載された論文等は一定期間を経た後に電子化され、インターネット上に公開される。公開を望まない場合は、事務局に申し出ることにより、非公開とすることができる。

執筆者一覧

深澤 俊	(Suguru Fukasawa)	中央大学名誉教授
惣谷 美智子	(Michiko Soya)	神戸海星女子学院大学名誉教授
佐藤 エリ	(Eri Satoh)	神戸女学院大学非常勤講師
津田 聖子	(Kiyoko Tsuda)	帝塚山大学名誉教授
中島 正太	(Shota Nakajima)	徳島文理大学教授
大嶋 浩	(Hiroshi Oshima)	兵庫教育大学教授

編集後記

今年はコロナ禍の対応に追われた大変な年となりました。新しい生活様式の実践、遠隔授業等の導入に伴い、これまで以上に多忙でストレスのたまる生活を強いられ、研究もままならない状況におかれた会員の方も多かったのではないのでしょうか。コロナ禍の影響で、投稿論文等の査読をはじめとする編集作業が大幅に遅れてしまいました。秋になってようやく編集作業を終え、無事発行できる見込みが立って安堵した次第です。投稿者の皆さま、書評を快く引き受けていただきました会員の皆さま、そして編集委員、協会事務局、出版元の大阪教育図書の皆さまに心よりお礼申し上げます。

本号は、特別寄稿1編、論文1編、書評3編、及び書誌文献データの構成となっています。特別寄稿では、深澤俊先生に昨年の全国大会でのご講演に基づく論考をご寄稿いただきました。エリオットの伝記的事実、『ダニエル・デロンダ』に対する諸家の見解、ユダヤ人問題を巡る社会状況や19世紀の音楽界の状況等に対する幅広い目配りがなされた重厚な論文を寄せていただきました。論文は、エリオットの『ミドルマーチ』とオースティンの『分別と多感』を取り上げ、緻密な読みと広い見地から、両作家の関係性を捉えた読み応えのある好論となっております。書評では、本会員のすぐれた著訳書、『ダーク・ヒロインー ジョージ・エリオットと新しい女性像』と『回想録 ヨーロッパめぐり』、及びエリオット文学における経済のあり方を論じたものを取り上げています。投稿論文の数が少なかったのは残念でしたが、エリオット文学を多面的に照射する内容の学術誌となっていると言えるようです。

コロナ禍の収束の兆しが見えない状況下ですが、編集委員一同、学会誌のさらなる充実を目指して頑張る所存ですので、来年度、会員皆さまの活発なご投稿を期待いたします。

2020年10月15日 大嶋 浩

ジョージ・エリオット研究・第二十二号
(*The George Eliot Review of Japan: The Twenty-Second Issue*)

編集委員 (Editors)

大嶋 浩 (Hiroshi Oshima, Chief Editor)
池園 宏 (Hiroshi Ikezono)
岸本 京子 (Kyoko Kishimoto)
窪田 憲子 (Noriko Kubota)
永井 容子 (Yohko Nagai)
谷田 恵司 (Keiji Yata)

ジョージ・エリオット研究・第二十二号

発行日 2020年11月25日
編集・発行 日本ジョージ・エリオット協会
代表者 福永 信哲
印刷所 大阪教育図書株式会社

発行 日本ジョージ・エリオット協会
(The George Eliot Fellowship of Japan)
徳島文理大学香川校 中島正太研究室内
〒769-2193
香川県さぬき市志度1314-1
電話：087-899-7100
E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com
